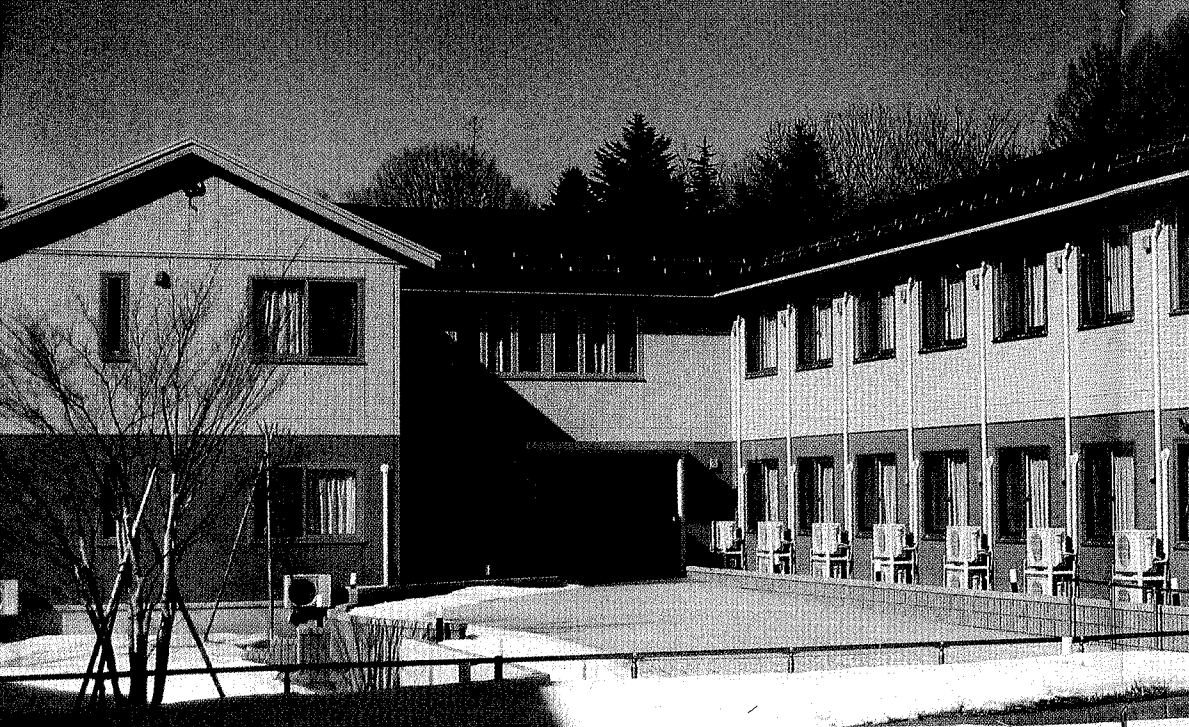


主
は、生まきておられる
Unser HERR lebt



2015 **36**
graph magazine vol.

Unser
HERR
lebt

Unser
HERR
lebt
主ま生まきておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。(ヨハネ3:3)

vol. **36** 定価100円(税込み)

メッセージ

- 4 「いったいどうしたのか?」---薬棚である聖書! ゴットホルド・ベック

12人の証し

- 18 信じさせてくださる神を持つ幸福 山田健
25 イエス様に感謝して悔い改めの日々を続けます 宮崎文男
33 救いによる過去の克服 主からの賜物すべてに感謝して 宮崎初恵
43 主からのおくりもの 木村茂昭
52 主のすばらしさを味わい、これを見つめよ 木村静恵
60 祈って求めるものは、そのとおりになります 山田晃
62 イエス様からの宝物 米倉泉
64 みことばのとおりになりました 丸茂光
67 主は、教えてくださり、守ってくださいます 植木実結
70 主は、こんな私にも働いてくださった 吉岡勝義
78 憩いの水に導かれて 吉岡順子
86 信じる者になりなさい 後藤隆

表紙／御代田の第3ゲストハウス(2014年12月竣工)

Unser
HERR
lebt
in
Ihnen

「いったいどうしたのか？」——薬棚である聖書！

ゴットホルド・ベック

主ご自身がこうおっしゃっています。「願いなさい！あなたの願ったとおりになる」。もし、あなたが主に頼むことをしなければ何も起こりません。誰も救われませんし、用いられません。

王の王である主イエス様はきょう私たちの前に立って、次のように尋ねておられます。「いったいどうしたのか？あなたはわたしに何をしてほしいの？」と。

主イエス様はあらゆる病氣をお癒しになる偉大な医者であり、あらゆる禍（わざわ）いを良いものにする救い主、どのような罪をも赦すことがおできになる贖（あがな）い主であり、あらゆる束縛から解き放つ

てくださる偉大な解放者です。

私たちは、体調が良くないとき、しばしば薬を飲みます。薬はからだの病氣を予防したり治したりします。しかし肉体だけではなく、魂も健康を損ねることがあります。実際のところ、多くの人は肉体的には健康でも、魂は動揺しています。そういう人にはどのような薬が役に立つのでしょうか。主のみことばこそがその薬です。聖書は人々を癒す薬が豊かに揃（そろ）えられた薬棚のようなものです。

今回は聖書から詩篇37篇という薬箱を取り出して開けてみましょう。詩篇37篇にある薬はどのよう

な病氣に効くのでしょうか。七つの症状があてはまります。

第一の病氣は、悪を行う者の繁栄に戸惑って混乱します。第二の病氣は、周囲からのすべての要求に自分が応えられないのではないかと思ひ煩ひます。第三の病氣は、状況に打ちのめされて意氣消沈し、耐えがたくなります。第四の病氣は、あることに腹を立てて憤慨が収まらず、執念深くこだわを持ち続けます。第五の病氣は、自分がほんとうは救われていないのではないかという不安に満たされ、情緒不安になります。第六の病氣は、主イエス様が導いてくださらないのではないかと動揺します。第七の病氣は、絶望の淵にうずくまり起き上がれなくなるというものです。

これらの病氣は重症になりやすく、また非常に伝染しやすいもので注意が必要です。私たちは、一見肉体的には健康そうに見えて実は内側が病んでい

「いったいどうしたのか？」——薬棚である聖書！

る、という病人に到る所で出会います。けれども素晴らしいことに、私たちは聖書という、豊かに満たされた薬棚をもっているのです。主の薬棚にある薬には副作用の心配がありませんし、完全に無料です。どの薬も治すためだけではなく、予防のためにも推薦できます。

詩篇37篇がどのような効き目を發揮するか、順に見てゆきます。

第一の病氣

第一の病氣に対してはどうでしょうか。悪を行う者が栄えることに戸惑っているなら、最初の瓶（びん）から錠剤をお取りください。

悪を行なう者に対して腹を立てるな。不正を行なう者に対してねたみを起こすな。彼らは草の

ようにたちまちしおれ、青草のように枯れるのだ。

(詩篇 37・1～2)

詩篇の作者ダビデも、悪を行う者がうまくいっているのを見たとき、戸惑い、非常に混乱したのです。自分のことしか考えない、自己中心的な人物が成功しているように見える例は多くあります。それらの人々は神様への愛を少しも持っていないどころか、主を否定し、主の御名を汚すことさえしています。それにもかかわらず、すべてはうまくいっているように見えるのです。

偽善者が嘘をついて自分の目標を達しているようにも見えます。欺(あざむ)く者が偽りの行為によって一層豊かになっているように見えます。暴力によって自分の意志を貫徹している人々も見られます。「革命」を唱える人々が武力で権力を奪い取り、罪のない人々が抑圧され、自由を奪われています。生けるま

た。だが、彼は過ぎ去った。見よ。彼はもういない。

私は彼を捜し求めたが見つからなかった。

(詩篇 37・10、13、35～36)

主のみことばに、あなたの心の耳を傾けてください。主のみことばにはあなたを癒(いや)す作用があります。主のみことばを通して突然、あなたはいろいろな事柄を別の光の中で見る事ができるようになります。あなたは、生けるまことの神がすべての者の上に立っているのを知るでしょう。主は決して手に持つ手綱を放されません。主イエス様は悪者の働きを見ておられただけではなく、その理由をお持ちです。すべては主の時に明らかにしてくださることでしょう。

あなたが腹を立て、妬(ねた)みをもったとき、主のみことばの薬を飲むと、突然、別の心の態度をおぼえるでしょう。そして、神を知らず、まことの望みもな

「いったいどうしたのか？」——薬棚である聖書！

ことの神を否定し、悪に悪を重ねる人々が勝利をおさめているかのようです。

このような現実を見ると、疑問が次から次へと湧(わ)き上がりますが、誰もこれに満足のいく答えを与えてくれません。多くの人が途方に暮れています。そこで、神のみことばの薬を取り出しましょう。みことばは「悪を行なう者に対して腹を立てるな。不正を行なう者に対してねたみを起こすな。彼らは草のようにたちまちしおれ、青草のように枯れるのだ。」(詩篇 37・1～2)と言っています。さらに、こう続きます。

ただしばらくの間だけで、悪者はいなくなる。あなたが彼の居所を調べても、彼はそこにはいないだろう。……主は彼を笑われる。彼の日が迫っているのをご覧になるから。……私は悪者の横暴を見た。彼は、おい茂る野性の木のようににはびこってい

く、恐ろしい永遠の滅びに向かっているあらゆる人々を気の毒に思うことでしょう。悪を行う者の時は定められています。見せかけの幸せは間もなく駄目になるでしょう。

第二の病氣

第二の病人は、周囲からのすべての要求に応じる事ができないのではないかと心配になっています。人々から信用を失ってしまうように見え、先行きが分からず不安になっています。このようなとき、二番目の瓶からもう一つの錠剤を取り出してください。神のみことばは次のように言っています。

主に信頼して善を行なえ。地に住み、誠実を養え。

(詩篇 37・3)

主のご命令は「健康促進剤」です。「主に信頼しなさい。目に見えるものに支配されないようにしなさい」と命じておられます。そして、生けるまことの神は私たちの生計をも顧みてくださる、というのは素晴らしい事実です。旧約聖書からエリヤの例を見てください。

「ここを去って東へ向かい、ヨルダン川の東にあるケリテ川のほとりに身を隠せ。そして、その川の水を飲まなければならない。わたしは烏に、そこであなたを養うように命じた。」それで、彼は行って、主のことばのとおりにした。すなわち、彼はヨルダン川の東にあるケリテ川のほとりに行って住んだ。幾羽かの烏が、朝になると彼のところにパンと肉とを運んで来、また、夕方になるとパンと肉とを運んで来た。彼はその川から水を飲んだ。

(1列王 17・3～6)

年離れた今も、正しい者が見捨てられたり、その子孫が食べ物請うのを見たことがない。

(詩篇 37・19、25)

主はすべて必要なものを与えてくださいます。私たちは決して一人ぼっちにはさせられません。主は私たちを配慮してくださると約束してくださいました。そして、主は偽(いつわ)ることのできないお方です。

神は人間ではなく、偽りを言うことがない。人の子ではなく、悔いることがない。神は言われたことを、なさらないだろうか。約束されたことを成し遂げられないだろうか。(民数記 23・19)

私たちが主のみことばの薬に頼ると、主は私たちのためにみことばを実現してくださいます。

ところがエリヤが驚いたことに、しばらくするとその川が涸(か)れたのです。どうなるかとエリヤは驚きました。が、心配する必要はありませんでした。主がすでに一つのご計画をもっておられたからです。主は言われました。

さあ、シドンのツアレファテに行き、そこに住め。見よ。わたしは、そのひとりのやもめに命じて、あなたを養うようにしている。(1列王 17・9)

エリヤの神は私たちの神でもあります。主イエス様は昨日も今日もいつまでも変わらないお方です。すべての心配を無用にするため、主は素晴らしい約束をお与えくださいました。

彼らはわざわざい有的时候にも恥を見ず、ききんのときにも満ち足りよう。私が若かったときも、また

第三の病氣

第三の病人は、意氣消沈し、打ちのめされ、耐えがたい思いに囚(とら)われています。主は私のことなど忘れてしまい、私の祈りは聞き届けられないだろうと感じています。私たちは突然の困難に襲われると、かんたんに落胆し、意氣消沈してしまうのではないのでしょうか。自分は忘れられ、もはや愛されていない、もう誰からも配慮されていないという孤独で憂鬱(ゆううつ)な思いに沈みます。そのとき、第三の瓶から薬を取り出してください。

主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。主は、あなたの義を光のように、あなたのさばきを真昼のように輝かされる。主の前に静まり、耐え

「いったいどうしたのか?」——薬棚である聖書!

忍んで主を待て。おのれの道の栄える者に対して、
悪意を遂げようとする人に対して、腹を立てるな。

(詩篇 37・4～7)

詩篇37篇の4節～7節の聖句が、どうやって私たちの憂鬱な気持ちを治すことができるのでしょうか。主のみことばによって、打ちのめされた状態から本当に脱出できるのでしょうか。この問いに対して私は何一つ説明できません。ただ次のように言うことができますだけです。「主のみことばを真剣に受け取ってください。それをあなたのために個人的に求めてください。主のみことばに従ってください」と。そうすればあなたは癒す力を経験するに違いありません。

みことばは言っています。「主をおのれの喜びとせよ」。あなた自身から、あなたの感情から、あなたの惨めな状態から、目をそらしましょう。「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ」。すべてを主にゆだね

ね、主に信頼しましょう。主イエス様はあなたを失望させることはありません。主イエス様の前に静まり、主イエス様を待ち望みましょう。主イエス様の命令に従う人は癒やされ強められます。

第四の病氣

第四の病人は、腹を立てたまま憤慨が収まらず、執念深くこだわりを持ち続けて神経過敏になっています。このようなときは、第四の瓶から強い頓服(とんぷく)を取りだしてください。感情が今にも爆発しそうだと感じるなら特に急ぐ必要があります。

怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな。
それはただ悪への道だ。(詩篇 37・8)

予期しないことがしばしば不機嫌と怒りの原因と

なります。不親切で無遠慮なことばを投げつけられると、私たちは熟慮する間もなく不本意な行為となり、憤慨してしまいます。パウロは「エペソ人への手紙」の中で、聖徒たちに次のような警告をしています。

怒っても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで憤ったままでいてはいけません。悪魔に機会を与えないようにしなさい。(エペソ 4・26～27)

あなたは怒ることがあるかもしれませんが。けれども、怒りが罪にならないように気をつけましょう。怒りに機会を与えてはなりません。怒りと憤慨を日没まであなたの中に宿らせてはいけません。さもなければ、私たちは簡単に悪魔につけ入る余地を与えてしまうからです。

別の言い方をするなら、私たちは寝る前に必ずみことばという薬を飲むべきだということです。「みこ

とばによって」私たちはもはや憤らず、腹を立てず、神経過敏にならず、執念深くならないように整えられなければなりません。夜が始まる前に、私たちは主との関係、また隣人との関係を清算しておくべきです。

私たちがこのみことばを薬として食べ、自分のものとするならば、多くの問題は大きくならず済むでしょう。また多くの悩みや難しい状況は解決されるでしょう。腹を立て、何があっても絶対には許したくないと執念深く思っている人は、自分自身を一番傷つけるのです。みことばの薬をのみましょう。

第五の病氣

第五の病人は、救いの確信がなく、救われていないのではないか、という不安に満たされています。そして、永遠のいのちと安全についての疑いに侵されています。

「いったいどうしたのか?」——薬棚である聖書!

ます。

救いの確信がなく、主が本当に自分を受け容れてくださったのかどうか分らないと思う人たちは、いつ暗闇の中に追い出されるかもしれない、という恐れで情緒不安定の中に生きています。それはサタンの仕業です。あなたもまたこの不安、この疑いを味わっていませんか。特に夜になると、しばしばサタンは信者から確信を奪うために攻撃してきます。このような最初の状態にさせる病気には強い薬が必要です。みことばの薬箱をただちに開けてください。

主は全き人の日々を知っておられ、彼らのゆずりは永遠に残る。
(詩篇 37・18)

その人は倒れてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえておられるからだ。

(詩篇 37・24)

のみことばです。確信の土台はただ主の永遠のみことばなのです。

主のみことばにより頼み、主が約束してくださることを幼子のように信じなさい。あなたが正直になつて主イエス様の御許(みもと)に行くならば、主はあなたを永遠の愛をもって受け容れてくださるということを知ってください。

主ご自身が「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」(ヘブル 13・5)と約束なさったからです。私たちが理解できるか否かに関係なく、主は「決して」と言われたのです。「決して」は「決して」以外の何ものでもありません。

主によって受け入れられた人は永遠の安全の内にいます。この永遠にまっとうされる事実のために、日々主に感謝しましょう。

まことに、主は公義を愛し、ご自身の聖徒を見捨てられない。彼らは永遠に保たれるが、悪者どもの子孫は断ち切られる。
(詩篇 37・28)

主は、彼をその者の手の中に捨ておかず、彼がさばかれるとき、彼を罪に定められない。

(詩篇 37・33)

ここで二度「永遠」ということが使われています。主イエス様は、たとい私たちが失敗して倒れたとしても、決して見捨てないと約束しておられます。

主イエス様の愛は何があつても断ち切られることなく、その愛によって回復させていただきます。主イエス様は救われた者を決して捨てません。主イエス様によって贖われた者は「永遠の安全」の中にいます。

もしあなたがこの確信をもっていないか、あるいは失ってしまったなら、その確信を得るただ一つの道は主

第六の病気

第六の病人は主イエス様の導きについて動揺しています。彼は主のご計画を理解できません。そして主イエス様がそもそも自分の働きと、自分の将来のご奉仕に関心をもっておられるかどうかを疑っています。その結果、この人は熱意を失い、霊的に次第に疲れてきます。この病気に効くみことばの薬は何でしょうか。

人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。その人は倒れてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえておられるからだ。
(詩篇 37・23~24)

私たちが主なる神様の導きを考えようとすると、常に次のことを重視しなければなりません。主

「いったいどうしたのか？」——薬棚である聖書！

によつて導いていただくことに私たちが関心を持つて
いる以上に、主イエス様ご自身が私たちを導くこと
を願つておられるということです。

私たちが主に信頼し、主により頼み、主の導きを
待ち望みつつ、主だけを喜びたいと思つてゐるならば、
主イエス様はかならずご自分のご栄光と私たちの最
善に至る道へと導いてくださいます。たとえ、私たち
が躓(つまず)いたり倒れたりして、それが何度も繰
り返されたとしても、主イエス様はお見捨てになら
ず、私たちを助け、引き上げ、新たに強め、力を
与えてくださいます。

若い男性は自分の将来について、いったいどうなる
のだろうかと動揺することがあるかもしれません。
また若い女性は将来の伴侶について、いったいどんな
人と結ばれるのだろうかと不安になるかもしれません。
一切のことを主にゆだねてください。そして、ゆだ
ねたすべてのことを主の御手にお任せし、明け渡し

ましょう。あなたのために刺し通された主が、あなた
を守り導きたいと願つておられるのです。

第七の病氣

第七の病人は、絶望の淵におかれています。彼は
解決を求めてあちこちをさまよい、とうとう進退き
わまつてしまいました。この病氣にはどの薬がよいの
でしょうか。詩篇37篇の39節を見てみましょう。

正しい者の救いは、主から来る。苦難のときの彼
らのとりでは主である。
(詩篇 37・39)

主ご自身が「苦難のときのとりで」である、とい
うのは事実です。あなたは今大変な苦難の中にいるか
もしれません。しかし主のもとに逃れ、主イエス様に
すべてをゆだねるならば、主はあなたを助け守つてく

ださりと、とりでとなつてくださいます。

主イエス様はうそをつかれません。この薬を飲んで
ください。みことばを食べ、自分のものにしてくださ
い。苦しみをもつたまま主イエス様のところに行き、
主の前にあなたの心を注ぎだしてください。そうす
れば主イエス様が解放してくださることを必ず経験
します。主が、あなたを圧迫する重荷を取り去つて
くださり、あなたを大切に扱われ、捨てたりなさら
ない方であることを経験します。

これまで七種類の病氣について考えてみました。
第一の病氣は、悪を行う者の繁栄に対する戸惑い。
第二は、あらゆる要求に応じられない心配。
第三は、打ちのめされ、意気消沈し、耐えがたい状態。
第四は、憤慨が収まらず、執念深く神経質な状態。
第五は、自分が救われているかどうかの不安。
第六は、主の導きに対する動揺。
第七は、絶望の淵にいる状態でした。

これらの病がどれほど重症でも、主イエス様はあ
なたを癒してください。

最後に、二つのことを少しだけ考えてみましょう。
第一に、聖書の薬棚には「鏡」がついています。人が
薬棚の前まで行くと自分自身が見えます。鏡は私
たちの姿を映すので、私たちは、生けるまことの神が
私たちをどうご覧になつておられるかが分かります。
自分の傷と欠陥を認識し、自分はいかに憐れむべき、
みじめな存在であるかを見ることができます。

第二に、薬棚の戸を開けるとその中にたくさん
の薬が入っています。あらゆる苦しみ、悩みに対して有
効な治療薬がありますが、それを見たり数の多さに
驚いたりしているだけでは、何の癒しも経験できませ
ん。薬瓶の蓋をとって匂いをかいでも効果はありません。
それを飲まなければならないのです。薬を飲んで
はじめて、その効果があらわれるのです。このことに
ついてヤコブが書き記していることはとても重要です。

「いったいどうしたのか？」——薬棚である聖書！

ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。

また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。みことばを聞いても行なわない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見る人のようです。自分をながめてから立ち去ると、すぐにそれがどのようなであったかを忘れてしまいます。

ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行ないによって祝福されます。

(ヤコブ 1・21、25)

あなたはいったいどんなふうに、みことばの薬棚に

向かうのでしょうか。ヨハネは「第三の手紙」の中で愛するガイオに次のように書き送りました。

愛する者よ。あなたが、たましいに幸いを得ているようにすべての点でも幸いを得、また健康であるように祈ります。

(3ヨハネ 2)

このみことばによると、ガイオが霊的に健全であったことが分かりますが、彼が肉体的にも健康であるようにとヨハネは願ったのです。大部分の信者においては、これと逆のことが見られるのではないのでしょうか。つまり、肉体的には健康でも、霊的に憐れむべき状態にあるのです。なぜこんなことになるのでしょうか。あなたの霊的健康のために、主が提供なさっておられる薬棚を見て、自由にお使いください。ヤコブが言っているようにみことばを「心に見つめて離れない人」は「その行ないによって祝福されます」。

詩篇37篇を二、三度「読むことだけ」では十分ではありません。主の約束について深く考えてください。自分の苦しみ、問題をもって主イエス様の御許に行ってください。「主のみことば」があなたに語っていることを、心を澄まし受け取ってください。「主のみことば」は静養の薬です。「主のみことば」によってあなたはただ単に自分の救いを確信するに至るだけではなく、強められ、主に栄光を帰することができ、それによって主イエスお一人がほめたたえられるようになるのです。

主のみことばの薬を飲むことをやめないでください。

渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。

(黙示 22・17)

「いったいどうしたのか?」——薬棚である聖書!

信じさせてくださる神を持つ幸福

山田 健



妻の絹子さんと

私は、一九八六年頃、吉祥寺キリスト教会旧会堂で洗礼を受けました。

妻とは結婚以来四十年ほどたちますが、一度もケンカをしたことはありません。当時も、家庭に不和があったわけではありません。しかし、いつもお互いに不安や思い煩いがあり、また、子どもの一人が長年病気を患っていたことでも悩んでいました。でも、それで神を求めたわけではありませんでした。求めようにも神様を知らなかったのです。

私が信仰に導かれた経緯はこうです。そのころ、ベックさんがおいでになる家庭集会在月一回、近所の、娘の同級生の家で行われていました。そして、妻が誘われて、そこに集うようになったのがきっかけでした。妻は集会から帰ってくるたびに、その内容を「こうだった、ああだった」と嬉しそうに私に語りました。こんな状態が一年ほど続いたある日のこと。いつものように集会に出かける前に、妻は私に「ちょっと行ってみ

る？ベックさんに会ってみますか？」と言いました。私は、その時、「ちょっと行ってみようかな」という気持ちになって、そして、ベックさんにお会いすることになりました。

ベックさんのお話しの中でとても心を動かされたのは、集会に集っている人たちを指してベックさんが、「あの人はいい人たちに見えるでしょう？でも、あの人はみんな悪い人なんです。人間はみんな罪人だよ。だから、あの人たちを信じてはいけません。もちろん私のことも信じてはいけません。私の言うことも嘘なのだから。信じられるのは神の言葉だけです。あなたは、聖書のみことばだけを信じてください」と真剣に言われたことでした。ベックさんご自身が「自分の言うことも嘘である」と語られたその言葉に、私は真実を感じたのです。その時から、私の信仰生活が始まりました。

その後の信仰の歩みでは、さまざまなことがあり

ましたが、ここではわが身に降りかかった試練を通して体験した神様の御働き、恵みについて、証しさせていただきます。

二〇二三年十一月最後の日曜日のことでした。礼拝が終わり、福音集会在が始まるまでの休憩時間に、集会に集っているお医者さんの姉妹から、「血液検査の結果で腫瘍マーカーがとても高く心配なので、設備の整った大きな病院ですぐ精密検査をしてください」と告げられたのです。その時は、びっくりしたとか衝撃が走ったとかいうより、一体何が自分に起こったのだろうかと思いました。しかし、それからだんだんと心が重くなり、不安で、まるで重りを負っているような気持ちになりました。それというのも、その三か月前の八月、私の兄が脾臓がんで天に召されたばかりだったからです。もしかしたら、自分にもそういう時が訪れたのかもしれないと思いました。また、何かの間違いではないかとも思いました。自覚症状はまった

くありませんでした。

しかし、病院には行かなければと、兄を診てくださった医師の方に連絡を取り、神奈川県立がんセンターに診察予約をいれ、兄がお世話になったお医者さんに診ていただきました。その日から検査、検査となりました。

診察予約から検査の日まで、約一週間ありました。その間、心の整理はつきません。一体自分に何が起こったのだろう？本当だろうか？間違いであつてほしいものだ。仕事をどうしよう。これからどうしたらいいのだろう、と心は重く、揺れ動きました。

「人はいつか死ぬものだから、自分にもいつかそういう日が来るだろう」と、頭ではわかっているつもりでいましたし、納得もしていました。しかし、いざ、その時が来たのかと思うと、やはり気分は軽やかではありませんでした。

三か月前に召された兄は、がんがわかった時には

すでに末期で、手術もできませんでした。余命が年

単位ではなく、月単位と知らされた時、兄はどんな気持ちだったのだろう？心の晴れない毎日ではなかったろうかと思ったりしました。そして私は、自分にもその時が来たのか？本当に？どうしよう？と、考えてわかることではないけれど考えてしまいました。

しかし、実感も湧きません。祈ろう。どう祈ろう。心は揺れ動きました。ベックさんに報告したら、「風邪をひいたと思えばいいよ」と言って、そのあと、「思わずらうな、だよ」と言ってくださいました。

イエス・キリストを信じていてよかった、と思います。祈りっぱなしで終わる神ではなく、聖書のみことばで答えてくださいます。答えをもらおうと聖書を読みました。神を信じた人々は、このような時にはどうしたろうか？と聖書の記述を探したりもしました。

イエスはガリラヤ全土を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病氣、あらゆるわずらいを直された。イエスのうわさはシリヤ全体に広まった。それで、人々は、さまざまの病氣と痛みに苦しむ病人、悪霊につかれた人、てんかん持ちや、中風の者などをみな、みもとに連れて来た。イエスは彼らをお直しになった。

(マタイ 4・23、24)

イエスが手にさわられると、熱がひき、彼女は起きてイエスをもてなした。

(マタイ 8・15)

これは、預言者イザヤを通して言われた事が成就するためであった。「彼が私たちのわずらいを身に引き受け、私たちの病を背負った。」

(マタイ 8・17)

この悩む者が呼ばわったとき、主は聞かれた。こうして、彼らはすべての苦しみから救われた。

(詩篇 34・6)

そうだ。イエス様は、いやしてくださいる方だ。悩みを聞いてくださる方だ。なんでもできる方だ。そのように改めて思えました。神にとって不可能なことはないとも書かれています。「どうかこのことが間違いないように？病氣ではないように」と祈りました。とても臆病な妻は、私以上に祈ってくれましたが、大きい病院で調べてくださいと言われた時からすぐに、主にある信仰の兄弟姉妹がたに連絡をとって、「祈ってください」と伝えていました。神様の与えてくださった集会の兄弟姉妹たちは、みことばをたくさん送ってくれました。それだけでなく、祈ってください、また、涙をもつてともに苦しんでくださいました。

兄弟姉妹たちから送られた聖書のみことばはとて

も励みになりました。苦しみを共にしてくださる兄弟姉妹を、神は与えてくださったのです。言葉にならないくらい大きな支えとなりました。ふだん、自分が病氣の人に差しあげている聖書のみことばは、何げなく書いているところもありましたが、受け取る側になった時、「こんなに心強いものはない」ということを改めて思われました。

内臓の検査の結果が出ました。「内臓にはがんはありません。肺、胃、脾臓、肝臓、腎臓全部大丈夫です」と言われました。ホッとしました。「しかし、この腫瘍マーカーの数値からすると、どこかにがんがあります」と言われました。

それも間違いであるように祈りました。検査は、とてもつらかったのですが、検査の間中祈っていました。祈りを聞いてくださる方がおられるから耐えられることも知りました。間違いであるようにと祈っていましたが、検査の結果、やはり大腸にステージ3の

がんが見つかりました。開腹の手術、そして、抗がん剤治療が必要です、と言われました。そうかやっぱりがんがあつたのか、と思いました。

しかし、その時、心はとても平安でした。いつの間にか、心は平安になっていました。イエス様は病氣はそのままにして、心をいやしてくださいました。妻も最初のころの不安から解放され、その時には心は安らかになっていました。

入院、また検査、手術、そのたび祈りました。兄弟姉妹からの手紙や励まし、みことばは本当に力になりました。そして退院、また、しばらくしてから検査、診察。診察の後、お医者さんは、こう言いました。「二応手術で悪いところは採りました。あとは、再発を防ぐために抗がん剤を使いましょう」。私は、「抗がん剤を使うとどんな副作用がありますか？」と聞きました。医師は「人によっては、食欲の減退、手足のしびれなどがあるようです。また、そういう症状が

まったく出ない人もいますようです。やってみなければわかりません」ということでした。先生はとても正直な方でした。

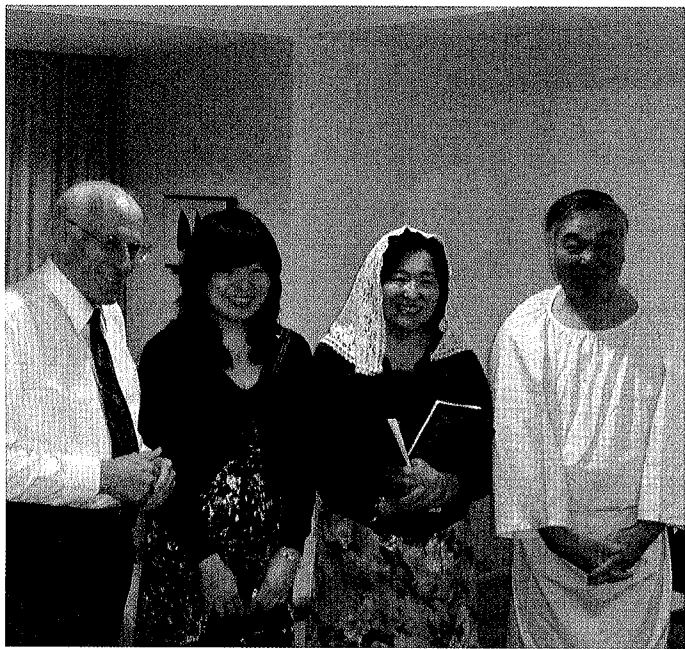
「抗がん剤の効果は、統計的には、再発をした人を含めて、五年生存率が10%ほど上がるようです。100人使用して、88人から90人くらいの人にはまったく効きません。しかし、約10%くらいの人には効果があるようです。ですから、どうするかはあなたが決めてください。私は医師ですから抗がん剤を勧めます」と言われました。

どうしたらいいのだろう、と本当に迷いました。「人によつては、たとえ1%でも可能性があればやるという人もいます」とも言われましたが、その時返事をする事ができず、「一週間待つてください」と言つて、家へ帰りました。また、ベックさんに「抗がん剤のこと、どう祈ったらいいでしょうか？」と言いましたら、「そうですね。神様から電報でどうしたらいいと来るわけな

いからね。詩篇などを読みつつ祈りましょう」と言うてくださいました。一人で祈っていました。抗がん剤治療を受ける気持ちはどうしても持てませんでした。生きるとか死ぬとかいうことを決めるのは、人間ではなく神様だ、という思いも出てきました。お医者さんと話したり、状況だけを見て物事を考えたりしている時にはとても不安になっている自分に気がつきました。心配したり迷ったりするのは、心がお医者さんの言葉だけ、あるいは今の状況だけに向かつてしまっている時だ、ということにも気づきました。

そして、お医者様に「抗がん剤治療は、しないことにしました」とお断りしました。医師の方も、「わかりました」と快く応じてくださいました。私は、心の重荷がすつと軽くなったような気がしました。

心をイエス様に注いでいる時、イエス様は必ず答えてくださいました。みことばは力である。みことばには力がある。このことは、いつも頭ではわかっているつ



右から文男さん、妻の初恵さん、長女の直子さん、ベックさんと

イエス様に感謝して悔い改めの日々を続けます

宮崎 文男

もりでいました。いくら知っていても、それを自分の体験としなければまったく意味がないことも知りました。ふだん何げなく、集会で使っている、「兄弟」、「姉妹」という言葉も、真の意味で、永遠の兄弟、姉妹であることも体験することができました。信じさせてくださる神を心に持つ幸福をこの病氣と共にいただけたことを感謝します。

自分自身に起こったことだけを考えて、「こんな病になってしまった。どうしよう」と思っていた時は心が騒いでいました。神様に目を向けた時、神様の約束にすぎた時、神様は私たちを救い、また守ってください方であることを味わいました。聖書のみことばにも「あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており」(1ペテロ 1・5)と書かれています。

この病を通して、いつも口ずさんだみことばがあります。

私をいやしてください。主よ。そうすれば、私はいえましょう。私をお救いください。そうすれば、私は救われます。あなたこそ、私の賛美だからです。

(エレミヤ 17・14)

病を通して、祈りを聞いてくださる神が私の主であることの幸いを覚えました。すぐに答えてくださる神がいます。一緒に悩み、一緒に祈ってくださいる信仰の友である兄弟姉妹がいます。イエス・キリストの恵みは、あふれています。

山田 健

一九四八年十二月十日生まれ

(鎌倉生まれ、横浜育ち)

横浜市立蒔田小学校、攻玉社短大卒

山田測量事務所 自営

1 生い立ち

私は、一九五三年に宮城県大郷町という小さな町の農家の次男として生まれ、育ちました。家族は、父母と祖母と兄の五人家族でしたが、私が生まれて二ヶ月後に兄が病気で亡くなり、戸籍上は次男でしたが長男同様に育てられました。

大郷町は仙台市の北隣に位置する町で、自然が豊かで田畑がともきれいな、東北の典型的な田舎の農村です。親戚はもとより隣近所すべてが先祖崇拜で、日常から仏教を重んじて生活しており、私もその中で農家の跡取りとして、いずれ宮崎家のお墓を守るため先祖崇拜を継承しなければならないと思っていました。

しかし、家は小さな小作農家で収入も少なかったことから、伯父の紹介で、伯父が勤めていた電力会社就職することになり、一九六九年三月に中学校を卒業すると同時に四月から宮城県多賀城市にあつ

た会社の実業学校に入学し、その学校の寮で生活をしながら三年間勉強しました。当時の私にとつて、思春期でプライドもできあがるころでしたので、学歴が中学卒業のみ、収入が少ないからということで高校に進学できないという現実、プライドを大きく傷つける人生のターニングポイントであったように思います。

一九七二年、十八歳で学校を卒業し、新入社員として石巻の事業所に配属となりました。

当時、会社は原子力発電所の建設計画を進めており、石巻の事業所は、地元の自治体や住民から建設の同意を得るため接触を重ねていた重要な地点でした。私もその一員として業務に携わり、原子力発電所1号機の建設から運転開始そして2号機の建設まで石巻に勤務しました。

2 傲慢で自己本位の時代

石巻の事業所には十七年勤務しましたが、この間、一九七六年、二十二歳のときに妻初恵と結婚して、一九七八年に長男（淳吾）、一九八四年に長女（直子）に恵まれました。

一九八九年三月、三十六歳のとき、長く勤務した石巻から仙台の事業所へ転勤しました。このころから仕事の責任も重くなり、家庭を振り向くこともなく、子育てや家庭での問題は妻任せとなり、一般的に言う会社人間となっていました。会社でのストレスを家庭へ持つて帰っては妻や子どもに当たり散らし、気に入らないと暴力を振るうようになりました。慢さや身勝手・自分本位に加え、自分以外は信じないという生き方をしていましたので、妻への暴力・暴言・傲慢な振る舞いは絶えませんでした。いま思うと妻や子どもたちには始終迷惑のかけどおしでした。

怒る者は争いを引き起こし、憤る者は多くのそむきの罪を犯す。人の高ぶりはその人を低くし、心の低い人は誉れをつかむ。（箴言 29・22～23）

また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なわない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。

（マタイ 7・26～27）

3 妻との確執

最近、夫婦で話して分かったことですが、妻は二〇〇〇年、四十五歳で、イエス様に出会い、仙台集会の礼拝や家庭集会に集うようになりましたが、私は、そのことにまったく気が付きませんでした。妻が日曜日に出かけるのは「変な友達か何かにはまってし

まったのだろう。家を黙って空けるので文句を言つてやろう」と毎週一人自宅で帰りを待ちながらいつも憤慨していました。しかし、どこへ行っているのか、と聞く勇氣はありませんでした。

この頃からそれまで以上に妻とは、何をするにも何かを話すにも、ことごとく意見が合わず、すれ違うような気がしていきました。ますます私は、もどかしさから暴言を吐いていました。

主よ。私は、あなたのさばきの正しいことと、あなたが真実をもつて私を悩まされたことを知っています。（詩篇 119・75）

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

（1ヨハネ 1・9）

あるとき、妻の態度が気に入らず、妻の聖書を破ってゴミ箱に捨てたり、またあるときは中庭の雪の中に放り投げたりしたことがありました。私は、自分の傲慢さと自分以外を信じようとしないうる性格を悔い改め、真剣に妻を理解しなければならぬ、とも思いましたが、しかし、そのきっかけがつかめないまま、それまでと同じようにすれ違いが続きしました。

人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だが、それを知ることができよう。

(エレミヤ 17・9)

同じように、夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。

(1ペテロ 3・7)

4 イエスを信じようと心に決めた日

二〇二年、五十八歳のときに、宮城県女川町の事業所に勤務していて東日本大震災に遭い、津波が来る五分前に高台に避難して助かりました。避難がもう少し遅れていたら津波にのまれていたと思います。震災後、電話も使えず家族と連絡を取る手段がないまま女川町体育館に避難をしていましたが、六日後に長男と連絡が取れました。家族全員が私を捜していたことを知り、このときほど家族がいる幸せを感じたことはありません。そして何にも替えがたい家族の暖かさと大切さを痛感しました。

震災から一ヶ月ほどして、妻と女川での震災体験や避難生活の話をしました。このとき妻は、仙台集會に集つていて震災で召された鎌田姉妹の夫、鎌田兄弟が始めて仙台集會に來られたときのことを事細(ことこま)かに私に話してくれました。

鎌田兄弟は七十歳を過ぎて初めて集會に來られて、

「私は、妻を守るために集會に來ました」と全員の前

でお話をされたとのことです。私はこのとき、「自分が七十歳になつても集會に行くだろうか」と自問自答しながら、二度も會つたことのない鎌田兄弟が、七十歳を過ぎてから奥様のためにすごい決意をされ、集會に來られたことに深い感銘を覺えました。私も震災で家族の暖かさと大切さ、それまでの家族への罪の深さに氣付かされていたこともあり、會社を定年したら自分も必ずイエス様を信じようと心に決めました。

苦しみに會つたことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。あなたの御口のおしえは、私にとつて幾千の金銀にまさるものです。

(詩篇 119・71、72)

いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。

(ヨハネ 6・63)

5 主イエス様の導きの日

震災から半年が経過した二〇二年九月、私は五十歳で電力會社を退職し、現在の會社に転籍しました。

一年が経過した二〇二年十月、ちょうど五十九歳の誕生日を迎えたばかりのことでした。本社から「會社と関連會社の評判が悪いので身辺を調べることにした」とあらぬ疑いをかけられ、私の職場へ調査に來ました。私にとっては寝耳に水のことでした。身辺の調査は数ヶ月続きましたが、このとき私は、「四十二年勤務して貢献した電力會社から裏切られた思いがして、この地球上には、神も仏もないな」と思いました。また、なぜ自分が疑われるのだろう、これからどう生きたらいいのかと悩みました。

このとき妻から、仙台で「二〇二年仙台喜びの集會」があり、ベック兄が來られることを知らせられ、ベック兄に會わせてほしいと自分から妻に頼みました。

実は、一九九九年九月、私が四十六歳、妻が四十五歳のとき、全く予期しない状況でベック兄にお会いしていたのです。妻と二人で北海道旅行をしていた小樽のガラス工場での出来事です。工場の見学を終えて帰ろうとしたとき、知らない背の高い外人さんが中へ入って来ました。それがベック兄だったのです。ベック兄は、札幌の喜びの集いに参加しての帰りとのことでした。妻は、その年の六月のドイツの喜びの集いに未婚者のまま参加していました。ベック兄は、ドイツで妻と別れるとき、「初恵、日本でまた会えるよ」と仰（おっしゃ）ったそうです。小樽のガラス工場で三ヶ月後に再会し、「初恵、日本でまた会えたね」と再会を喜んでくださり、ミンヘン姉妹はじめ同行の兄弟姉妹全員での記念写真を撮ってくださいました。お別れするとき、私もベック兄に握手をしていただきました。誰にも言えずにいたのですが、このときのベック兄の右手の感触がずっと残っていて不思議な現象だな

と思っていました。この感触は今でもあるのです。このことがあったため私は、ベック兄にお会いして祈ってもらおうと決心して、「仙台喜びの集い」の会場となった秋保温泉のホテルへ行き、ベック兄にすべての事を話して一緒に祈っていただきました。その後、会場の一番後ろの席で礼拝から福音集会まで参加させていただきましたが、肩の荷がすごく軽くなったことを今でもはっきり覚えています。また、その喜びの集いに参加されていた兄弟姉妹が私の名前を知っておられ、「よく来られました。祈っていましたよ」と歓迎してくれました。多くの兄弟姉妹が震災のときも祈ってくれていたことも教えていただきました。初めてお会いした集会の兄弟姉妹でしたが、その方々の深い愛とやさしい笑顔に大きな喜びを感じました。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。
(詩篇 37・5)

あなたは、私の神。私はあなたに感謝します。

しています。
(ローマ 8・28)

あなたは私の神、私はあなたをあがめます。

(詩篇 118・28)

6 洗礼の恵み

二〇一三年一月から仙台集会の礼拝に集うようになり、その年の三月の大洗の喜びの集いを初めとして四箇所（所）の喜びの集いに参加し、さらに御代田キャンプにも三回集わせていただきました。そして、満六十歳になり、仙台の喜びの集いでベック兄に祈っていただいてからちょうど二年が経った二〇一三年十一月四日に「近江八幡喜びの集い」で、多くの兄弟姉妹が見守っていてくれる中で洗礼の恵みにあずかりました。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っ

7 これからも主イエス様とともに

私は、まだまだ自己本位の生活や傲慢さが払拭（ふっしょく）できずにいる者です。へりくだることができず、イエス様にごめんなさいと素直に言えないところもあり、主イエス様に自分を変えていただけるよう祈っています。

しかし、仕事や生活の中で思い煩うとき、いつもイエス様からみことばと恵みをいただき、平安と喜びをもたらしてくださっていることを何度も実感しています。特に、「石巻門脇町コミュニティの福音と音楽の

集い」が二〇一三年十月と二〇一四年六月の二回開催されたことについては、イエス様から大きな喜びをいただく恵みにあずかりました。多くの兄弟姉妹が、吉祥寺集会から、また仙台集会から石巻に来てくださいましたことも本当に感謝です

イエス様を信じて一年半になります。妻にとっては、妻がイエス様を信じるようになった二〇〇〇年から私がイエス様を信じるようになった二〇一三年までは、長い長い十三年だったろうと思います。

今、私は、これまで犯した多くの罪、特に家族への多くの罪を悔い改め、毎日聖書を拝読してイエス様に感謝と祈りを続けています。私たちの生活の中心にイエス様がいてくださり、みことばをもって直接語りかけてくださるように、またイエス様にすべてを委ねて従って行けるように、日々祈っています。今後、妻と一緒にイエス様に感謝と祈りを続けたいと思います。

まことにわが家は、このように神とともにある。とこしえの契約が私に立てられているからだ。このすべては備えられ、また守られる。まことに神は、私の救いと願いとを、すべて、育て上げてくださる。

(2サムエル 23・5)

宮崎文男／一九五三年十月、宮城県大郷町生まれ、科学技術学園高卒

二〇二年 東北電力(株)退職、

現在、東北電力企業グループ(株)エルタス東北勤務
妻・初恵、長男・淳吾、長女・直子

救いによる過去の克服 主からの賜物すべてに感謝して

宮崎 初恵



左から初恵さん、夫の文男さん、ベックさん、長女の直子さん

賜物の証しⅠ 救われ主の者とされた

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

(ガラテヤ 2・20)

私がイエス様と出会ったのは一九九九年、妹の誘いで参加したドイツキャンプでした。肩で呼吸をしながら歩んでいるような人生で、憧れの地ドイツにひとときの安らぎを求めて参加したのです。ところが、集会で次々に語られるメッセージ、証し、聖書のみことばに心が反応し、頭の中がそれらの言葉で埋め尽くされ、初めの数日間は一睡もできず、自分自身と闘っていました。そしてそのキャンプの中で、ベック兄とのお交わ

り会に導かれ、宗教と信仰の違い、迷える子羊の意味、聖書は神様からの愛そのものであることなどを聞きました。一気に心が解け、見える光景が一変し、その後の兄弟姉妹方との交わりに味わったことのない温もりを覚えて帰国しました。

二〇〇〇年一月、ドイツで親しくお交わりいただいた姉妹からのお誘いで、仙台集会の礼拝に導かれました。なんとなく次の週も集い：そんな中で、次のみことばが私を貫くこととなりました。

心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。
(マタイ 5・3)

私のそれまでの人生は、我慢と諦めの繰り返しでした。信頼できるのは我が子だけで、その巣立ちの時までが親の責任、人生の転機はその時である、と必死に自分に言い聞かせていました。親からも夫からも

た。ことばは神であった。

(ヨハネ 1・1)

このとき、「北風と太陽」というイソップ童話を思い出しました。北風と太陽が旅人の外套を脱がせる力比べをする物語です。冷たい北風の力に、旅人である私は必死に外套をつかみ、身を守っていましたが、太陽であるイエス様のみことばに一気に暖められ、自ら外套を脱いだのです。そしてイエス様はこの小さな魂を御手に抱きあげ、新しい衣を着せてくださいました。

あなたがたはすでに死んでおり、あなたがたのいのちは、キリストとともに、神のうちに隠されてあるからです。
(コロサイ 3・3)

私が仙台集会に集うようになってすぐに、ミッシェンスクールに通う娘の直子が、ともに導かれ、主にあ

否定され続け、愛を感じることもなく心は傷だらけで、ぼろぼろの衣をまとった状態でした。冷たくただ体がそこにあるだけ。奮起なんてできるわけもなく、妥協をする己の卑しさ、惨めさを嫌悪し、自分の存在をこの世から消し去りたいとさえ願っていました。それなのにイエス様は心が貧しくても良い、幸いとおっしゃるのです。そればかりか、滅びの死を目標としていた私に、天の御国への希望を約束してくださいましたのです。

主の手に陥ることにしましょう。主のあわれみは深いからです。
(2サムエル 24・14)

私のボロボロの衣は取り去られる時がやってきました。

初めに、ことばがあつた。ことばは神とともにあつ

る喜びに浸っていました。

賜物の証し2 自らの十字架を負う

だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。
(マルコ 8・34)

仙台集会に導かれて四ヶ月後、息子の淳吾が、目が見えにくくという症状を訴え、病院で検査を受けました。結果、難病指定をされているパーチェット病であることが分かりました。この病は、原因は未だ定かではなく、精神的なストレスがもたらす自己免疫異常により、目や皮膚に炎症発作を生じさせ、その度合いにより失明に至ることもある病気です。

当時、淳吾は二十二歳、東北大学の大学院で応用物理を専攻し、「研究者になりたい」という目標に

向け、成功の道を歩んでいるように見えました。私たち家族も一心に応援していました。研究者を目指す彼には、致命的な宣告でした。

アブラハムは神様の試みに息子イサクを全焼のいけにえとして捧げ、従順を貫き、主の大きな祝福を受けました。そしてアブラハムが神に捧げものをしたその場所は「主の山の上には備えがある」と名付けられた、そのことを心に置きながらも、代わるものならば代わつてあげたいという思いがいつもありました。信頼できるのは子どもたちだけであった私にとって、自分の一番大事なものが試みにあうことの苦しみを、親として受け取っていました。目の前にある壁に向かい、自我の苦しみをぶつけるだけでした。

その中で淳吾は、病院で適切な治療を受け、体は何とか守られていきました。そして、大学院から企業への就職をする際、第二志望の企業に障害者枠で採用され、二〇〇二年に神奈川県厚木市で勤務す

婚宣言をしました。おそらく、幾多の困難を乗り越えて、めどがついての家族への報告だったと思います。彼らしい段取りだと思いつつ、喜ぶ夫とは裏腹に、私は危うさを覚えました。結婚の難しさを知るが故に、障害者の息子の結婚はイエス様の大能の力によるもの以外ないのだと思っていました。

その年の秋、初めて結婚相手である雅子と会いました。二人の間で着々と準備が進められているのを知りました。その年の冬、淳吾は網膜剥離で手術をすることに、その折、雅子とゆつくり交わる時間が与えられました。信仰を告白したうえで、障害者の夫との結婚生活は当然のように不安と困難の現実が予想できること、彼を支えるのは容易ではなく、まして雅子のご両親の思いを考えると忍びない、と伝えました。

しかし彼女から思いがけない言葉が返ってきました。「お母さん、実は出会った時から私の方が淳吾さ

ることとなりました。新生活に馴染んできたころ、淳吾に大発作が起きました。目の炎症は表から分かるほどで、ほとんど見えない状態でした。北里大学病院に駆け込み、即入院でした。集中治療が行われ、このとき、ベック兄がお見舞いにきてくださり、淳吾との交わりが備えられました。

二〇〇五年、東京本社の新研究所に異動になり、東京に転居しました。この時点で、服用した薬の影響で白内障を併発していたのですが、元々の病気の懸念があり、手術も受けられない状態でした。

祈り続ける日々、妹の木村静恵姉妹を通して新しい病院へ導かれました。良き主治医と出会い、即断で白内障の手術を受けました。その後も主治医の先生は、淳吾と医療面だけではなく個人的に携わってくださり、前進できるように今でも支えてくださっています。

二〇〇六年の夏、仙台に帰省した淳吾が家族にみんなに支えられているのです」と。さらに、やはり結婚に難色を示された雅子のご両親には、主治医の先生が説得に加わり、後押しをしてくださったということも聞きました。

その後、二人は二〇〇七年十二月の結婚式に向け準備を進めはじめ、私は「主イエス様、この結婚は主の御心かどうかお示しください。彼の幸いのために私は何をすべきですか」と祈る日々でした。そのお答えは、「恐れず、淳吾と向き合いなさい」ということでした。

結婚式を四ヶ月後に控えた夏、淳吾と向き合う時がやってきました。仙台へ帰省した彼に親として覚える危惧と、幸いを望む思いをありのままに話しました。彼は、素直に応援してくれない母に激怒して戻って行きました。しかし三ヶ月後、淳吾は再度帰省し、深い覚悟を持って結婚することを私に打ち明けました。

結婚式は人前式で行われ、結婚式後もわだかまりが少し残りながらも、妻をいたわる淳吾の姿に安堵しているところに息子夫婦から電話がありました。

「お母さん、自分たちのわがままに一年間我慢させて申し訳なかった。本当にありがとう」ということばに、その瞬間、目の前の巨大な壁が離れていききました。受話器を持ったまま、「イエス様、ごめんなさい」と心から繰り返しました。自分の律法的な信仰が、家族も自分も苦しめていたことを思い知りました。主イエス様は、私が愚かさのゆえに主の十字架を飛び越え、賜物を失うことのないように、守ってくださいしました。

私の心が苦しみ、私の内なる思いが突き刺されたとき、私は、愚かで、わきまもなく、あなたの前で獣のようでした。しかし私は絶えずあなたとともにいました。あなたは私の右の手をしっかりと

かまえられました。

(詩篇 73:21-23)

その後、淳吾は、助け手であり、伴侶である雅子との間に二〇二三年、奇跡的に新しい命が与えられ、必要は豊かに守られています。この家族が主のご栄光に変えられるのを待ち望み祈っています。

さて、この息子の結婚から三ヶ月ほどした時、私の信仰を迫害し続けてきた夫が、突然、「これから言う条件をお前が飲むなら、お前の宗教を認めてやる」と言い出しました。「恐れずに自分を捨てなさい」というイエス様の声が聞こえました。初めて天に、「私を一番愛してください。さるイエス様がすべてのすべてです。私の支配者は私のすべてをご存じの主イエス様のみです」と告白しました。その時、夫に対して自分が握っていた自分の都合と妥協を捨てました。肩で呼吸する息苦しさから解放され、主の栄光の中で大きく呼吸することができるようになりました。

私にとつては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。
(ピリピ 1:21)

まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心をつにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。(マタイ 18:19-20)

仙台集會に導かれてすぐに、靈の成長のために祈り會を備えてください、と祈っていました。二〇〇六年より九十歳になられた小笠原みどり姉妹宅で祈り會が備えられ、吉祥寺の学びのメッセージを聞いたリ、賛美をしたり、証しをしたり、ありのままを明け渡す祈り會を通して主の満たしを感謝していました。

近江八幡集會や吉祥寺集會から、みどり姉妹の娘さんにあたる姉妹方がお母さまのお世話をしにいらつしやる時は、みんな一緒に集う祈り會になりました。

二〇二年三月十一日、この日も祈り會をしていました。十四時四十六分、日々の歌¹⁰³番を賛美しているときに、経験したことのない激しい揺れを感じ、食器が音を立てて割れ、ものが落ちる音がしました。揺れの中で、みどり姉妹の体を支えようと寄り添う私に、みどり姉妹は私ともう一人の姉妹の頭を、まるで母親が子どもを包むように、抱きかかえてくださいました。

みどり姉妹は祈り會の姉妹方にとって、模範でもありました。お体は日に日につらさを増し、小さくなつて行きましたが、ご家族の兄弟姉妹に支えられ、ご自身を打ちたたき全身の力で、主イエス様に従っていらつしやいました。体が弱くなられ、危篤状態の中

で酸素マスクを装着したまま共に賛美し聖書のみことばを書き綴り、二〇二二年、九十六歳で天に召されるまで、ご家族全員の救いを祈っていらつしやいました。

また、仙台集会では震災の津波で姉妹が一名、その後二年間の間に三名の姉妹方が相次いで天に召されました。いつも寄り添って祈ってください、母のように主に導いてくださった姉妹方はみな、主の証しを残し、私たちの祈りも天に持っていくてくれました。

主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。主よ。あなたの恵みはとこしえにあります。あなたの御手のわざを捨てないでください。

(詩篇 138・8)

夫は私を否定し続けていましたが、彼自身は「否定されるのは嫌いだ」と豪語し、築き上げた成果を誇りとしてきた人でした。だからこそ、主イエス様だ

けがなせる、魂の救いに導いてください、とずっと私と娘でともに祈っていました。

夫は、震災時、東北電力女川原子力発電所に勤務していました。女川町は十六メートルの津波に襲われましたが、その中で想像を絶するような体験をし、たくさんの失われていく命を目の当たりにして、「自分の命が保たれたのは神様によるのではないか」と意識し始めました。その後、主は、夫がよりどころとしている大切なものを一つ一つ取っていかれました。そしてついに、二〇二二年の仙台キャンプにおいてイエス様の御許に参じることとなりました。「宗教だ」、と私の信仰を否定し続けてきた夫が自らキャンプに足を向けたことは驚きでした。ベック兄とともに祈りを捧げ、神の御前に頭を下げました。夫と私は悔い改めの祈りへと導かれました。

被災地となった石巻は私が生まれ育った町です。何が自分にできることか、と祈りながら歩む中、二

〇二二年のクリスマスに、吉祥寺集会・仙台集会の兄

弟姉妹方と女川町の仮設住宅の訪問に導かれました。サンタクロースとトナカイの恰好をし、楽器を鳴らしたり歌を歌ったりしていました。現地のみなさんにはこやかに応対してください、子どもたちは大いに喜びました。

震災から一年九ヶ月を経てもなお、被災者の方々が抱える事情は様々で、未曾有の体験は悩み苦しみという言葉が大変安易に思われるほどに人々を打ちのめしたことを、肌で感じました。

また、震災直後、吉祥寺集会の兄弟方が、門脇町という、二千二百世帯が流され、今は二十三世帯しか残っていない地域へ支援伝道をされていました。主の導きにより、その門脇コミュニティという自治会からのご要望をいただき、二〇一三年秋と二〇一四年六月の二度にわたり「音楽と福音の集い」が与えられました。主は、私たちと、門脇コミュニティに集う方々

の上にたくさんのご栄光を現わされました。

「主イエス様、感謝します。天の御国の確信を彼らにお与えください。人の心の中をすべて知られる主イエス様のまことの喜びに導いてください」と祈る毎日です。

・イエス様の大能の力に与り、罪が赦されて

新しいいのちと霊に移されている

・目に見えない尊さの確信

・主は、そのご愛のゆえに、私を探り

窮めていてくださる

・天の御国の確信をいただいている

・主イエス様はそこにご支配と權威の中に私を留めて、
まったくご愛で囲んでくださる

これらのすべての賜物のゆえに、感謝します。



右から義兄の文男さん、茂昭さん、妻の静恵さん、ベックさん、義姉の初恵さん、ミンヘンさん

主からのおくりもの

木村 茂昭

そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっきりぬぐい取ってください。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

(黙示 21・3～4)

恐れつつ主に仕えよ。おののきつつ喜べ。

(詩篇 2・11)

宮崎初恵(みやざき はつえ)

一九五四年宮城県石巻市生まれ

石巻市立女子高等学校卒業

家族 夫・文男、長男・淳吾(妻・雅子、修吾・三歳)、
長女・直子

私は、父木村茂、母和枝の長男として、一九五三年十二月八日、東京都練馬区で生まれました。後に二人の弟が生まれ、家族五人のサラリーマン家庭でしたが、私が二十二歳の時、父は五十一歳で突然亡くなりました。その時、母は四十九歳、弟は十六歳と十四歳でした。

父の死は私たち子どもにとっても衝撃でしたが、母の落ち込みようは大きく、何も手が着かない状態でした。それまでの母は、サラリーマンの父と家族を支える専業主婦でしたが、突然の父の死によって三人の子どもを養うことになり、おっとりした性格だったのが、自分をはっきり立たせ、人との交わりを望まない性格に変えられてしまいました。この母の性格が、後に私の妻とぶつかる原因にもなりました。

神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもつ

てあらかじめ定めておられたのです。

(エペソ 1:5)

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。

(エペソ 2:8)

私は二十六歳の時、職場で知り合った妻静恵と結婚したことが、後にイエス様に会わせていただく道への分水嶺となりました。

結婚三年目に長女千絵が生まれたのを期に、母との同居が始まりました。母五十六歳の時です。二年後に長男圭太も生まれ、母との家族五人の楽しい生活ができると思っていました。

しかし、母は、友だちを招いたり、遊びに出かけることはせず、一日中家にいることが多く、他方、私たちは子どもを通して知り合った友だちとよく外出して

いました。

母は次第に疎外感を持つようになり、妻に冷たい態度をとるようになりました。母と同居して五年後、関係は最悪となり、私たち四人は家を出てアパート暮らしが始まりました。しかし、妻の気持ちは癒えませんでした。

そのころ、子どもが通っている幼稚園で、集会の松田ご兄弟と保護者同士として出会わせていただきました。この出会いが、イエス様に導かれる第一歩になりました。

悩みのなかにいた妻は松田姉妹に、「なぜいつも穏やかなのですか」と尋ねると、松田姉妹は「そう見えるとしたら、イエス様が見せてくださっているのだと思います」と答えられたそうです。もし母との関係がうまくいっていたら妻は悩むことはなく、松田姉妹に声をかけることもなかったでしょう。

この会話がきっかけとなり、妻は松田ご兄弟のお

宅での家庭集會に誘われ、いつしか私も誘われました。私は気が進みませんでした。が、もし妻が悪い宗教に係わっているのだしたら今のうちに、と思い、確かめてみようという気持ちで参加しました。

家庭集會では、迎えていただいた姉妹方の満面の笑顔と握手に導かれて奥座敷に座り、自己紹介をしたり、話を聞いたりしたと思いますが、何もわからないまま家に帰りました。家庭集會に行くまでは、もし取り囲まれて脅されたら妻の手をとって逃げよう、と思っていました。が、終始穏やかな人たちを見て、悪い集會ではないと感じました。

その後、妻は救われましたが、私はただ同伴者として、家庭集會、日曜礼拝、御代田キャンプなどに参加していました。最初のころは、温かく迎えられることが心地良く、私自身も、自分は兄弟姉妹のなかにとけ込んでいる、と思っていました。が、求める気持ちはありませんでした。しかし、そのような状況が十

三年も続くと、未信者の私が兄弟のような顔をして集會にすることに悩むようになりました。何が目的で集會に参加しているのか、自問自答しました。聖書の勉強、妻の付き添い、キャンプの観光や食事、それとも単なる習慣、答えはわかりませんでした。いかは信じることができるかなと思いつつも、どのようなタイミングでその時を迎えるのか想像もできず、ただずるずると集會に参加していました。

一九九四年四月、実家を二世帯に改築、私たち家族は再び母と同居することになり、母は一階、私たちは二階と生活を完全に分け、お互い干渉しないようにしました。

二〇〇五年十月、私の勤めている会社の業績が悪化し、このままでは職を失うかもしれない状況になりました。そこで、生活の糧を得るために、以前からパッチワークの教室をしていた妻が本格的に手芸の店を始めました。会社がなくなっても、二人でそのお

店を経営していくつもりでした。しかし、思った以上に経営は厳しく、借金ばかり増えていき、毎月支払いに追われました。妻が苦しんでいる姿を見ても、私は助けることができず、神様に救いを求めることもしませんでした。

そしてある日、私にとっては些細なことと思われた出来事が、妻にとってはやり過ぎることができず、これまで我慢していた思いが彼女の中で爆発しました。私にはその理不尽と思える妻の怒りに対してどうしようもできず、これまで集っていた集会に行く気持ち失せてしまいました。そのような気持ちで迎えた日曜日の朝、私は「礼拝には行かない」と言ったのですが、「今日こそ一緒に行つて欲しい」と妻に言われ、仕方なしに出かけました。礼拝の間、どうしたら今の苦しみから抜け出せるのだろうか、と考えていたその時、ある兄弟が読まれた次のことばが、私の心に入りました。

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。
(1ペテロ 5・7)

妻の苦しみ。それを見て何もできない私の苦しみ。私は本当に深い思い煩いのなかにいましたので、このように言うてくださる神様にすがりたい、と思わされ、その礼拝の場でイエス様を信じ受け入れました。こうして救いにあずかりました。それから、私も祈りをささげることができるようになり、夫婦共にイエス様の守りのなかにおいでくださっています。

救われるまでは、自分の決めたこと、したことは正しい、としてきました。しかし、自分の無力さを知ったとき、こんな私の思い煩いを引き受けてくださる神様に「ごめんなさい」の思いと、「よろしくお願いします」の祈りを通し、心の平安を与えてくださいました。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をそこしえの道に導いてください。
(詩篇 139・23、24)

私の心の奥底にずっとしまい続けていた父の死について書きます。父は建設会社に勤めており、まさに日本の高度成長時代とともに生きていましたので、平日は帰りが遅く、父と会えるのは日曜日だけでした。それでも、私たち三兄弟とは小学校の校庭でよく遊んでくれました。

私が高校生るとき、父は仕事の激務により結核を発症し、結核菌が脳にまで達して幻覚症状が現れたほど重篤な状態でしたが、長い入院の後、社会復帰しました。しかし、元気になるにしたがい仕事の付き合いも増え、再び帰りが遅くなっていき、母の心配の種でした。

そんなとき、一九七六年二月七日、私が二十二歳のとき父は五十一歳の若さで突然逝ってしまいました。出張先の新潟の警察から、ホテルの部屋の浴室で死んだとの連絡を受けました。私と母は急ぎ新潟に向かい、警察署で父と対面しました。顔は父そのものでした。でも、現実を受け入れることができません。父が若いときに大怪我をした足の傷跡を確かめました。本当に父でした。発見時の父の状況を警察で知らされました。それは自殺を思わせるものでした。しかし、私には理解できませんでした。なぜなら父は、その翌日に行われる予定の旧制新潟高校同級会の幹事だったからです。

母にとって父の死は納得できるものではなく、「どうして」ばかり呟(つぶや)いていました。私も父の死を受け入れることができませんでした。誰にも言えず、妻にさえも、父は旅先で心臓発作で死んだのだ、とずっと言い続けてきました。父の死を認めたくな

かったのです。

母が二〇二年八月に介護付き老人ホームに入所し、叔父伯母が会いにきてくださった後の食事の場で、叔父が「魔が差したのかな」と父のことを顧みて口にしました。私は封印していたことに話題が及んだことと、妻にうそを言っていたことで、平安がなくなりしました。家に帰って、妻に本当のことを話し、「おやじとは天国で会えるのかな」と漏らしましたら、妻からは「私は天国にいると思うよ。でもベックさんに確かめてみたら」と返されました。

二〇三年十一月の仙台キャンプに向かうバスのなかでベック兄に父の死について話をしました。「父が天国にいる確信がないです。天国で再会できるでしょうか」と尋ねたところ、「あなたが天国に行ったとき、そこにお父さんがいなかったら、そこは天国じゃないでしょう」とおっしゃってくださいました。うれしかったです。それからは、昔のことはもういい、天国で

書くことは、介護してくれた妻、私を病院まで世話をしていただいた兄弟姉妹方のお話をまとめたものです。

当日の朝、自宅から妻と車で御代田まで走り、センターで皆とお昼を食べ、午後は喜びへのコンサートで合唱団の一員としてハレルヤなどを歌ったそうです。コンサートが終わった後、生気のない顔の私に妻が近づき話しかけたようですが、反応が薄く、私は「今日は何日か」、「御代田までどうやって来たのか」、「自分も歌ったのか」などと、何回も何回も繰り返し妻に質問したそうです。心配した兄弟姉妹たちが、脱水症状かと水を差し入れたり、疲れたみたいだから横になったら、と声をかけてくださいましたが、それには従わず、また同じ質問を繰り返し返したそうです。

その場におられた、お医者さんである姉妹がこの症状は普通ではないと感じ取られ、佐久総合病院に連絡をとってください、付き添ってくださいました。

再会できること、これからのことを考えよう、そう思うようになりました。この世では会えないけれど天国でまた会えるというすばらしい望みは、神様の恵みです。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。 (使徒 16・31)

神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

(1コリント 10・13)

二〇二年八月四日、御代田で一日だけの病が与えられました。病名は、一過性全健忘症です。この一日のことは自分の記憶として留めていないため、これから

病院でMRI検査をしました。脳には異常がないとのこと、一晩様子を見るために私は入院し、付き添ってくださいました兄弟姉妹と妻は帰りました。私が「わたし」であることを認識したのは、夜中の二時ごろのベッドの上でした。すぐに自分は入院していると悟りましたが、不思議と心は平安でした。

翌日の診察で一過性全健忘症と診断され、脳の「海馬」という、記憶を一時的に留める組織への血流が一時的に滞(とど)こるため起こる病気で、興奮や激しい運動などにより起こりやすいとのことでした。自宅から御代田まで車を運転したこと、御代田での食事の交わりやコンサートで歌ったことなど、家を出発してから夜中に病院で目が覚めるまでの約一日の記憶は、思い出すことはできません。

イエス様はなぜこのようなことを私に与えられたのか考えました。私はそれまで一度も入院するような病にかかったことがなく、いつも健康で、私が家族

の面倒をみるのだと思っていました。しかし、一寸先には何が起るか誰にもわからない、と気づかされました。自分が人に対して何かをしてあげようなどの思いを手放しなさい、と示されたと思いました。

それまでは、同居している母の認知がすみ、自宅での介護が難しくなってきたとしても、自分が母の世話をできると思い、施設への入居については曖昧(あいまい)にしていました。しかし、この時の病を通して、衰えても安心して生活していける施設があることを、母にはつきり話すことができました。それから三週間後に母は自分の老いを認め、施設に入りました。

母はいま老人ホームで暮らしています。同居していた時は決して人に頼ろうとせず、自分のことは自分でしないと気が済まないため、用事があっても一人で外出しないように、といくら言っても出かけてしまい、転んでは人の助けを借りて自宅まで送ってもらったり、救急車で運ばれたりしていました。家では常に眉

間(みけん)にしわをよせて、いつも見えない何かと闘っているように見えました。

その母がいまでは、いつも笑みを浮かべ、わがままをいつさい言わず、毎日穏やかにすごしているのです。そんな母の姿を見るとうれしくなります。あとは天国で父と再会できる確信をもってほしいと願います。

イエス様が私に与えられた苦しみや試練は、その時は辛いと思っても、実は最善な備えであったことをあらためて思い知らされました。これからは、家族の救いを待ち望み、祈っていきたいと思っています。

わたしは、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであっても、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。

(ルカ 11・9～10)

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

(1テサロニケ 5・16～18)

木村茂昭

一九五三年十二月 東京都練馬区生まれ

練馬区立大泉小学校・大泉中学校、

東京都立石神井高等学校、

日本大学理工学部交通工学科卒、

安藤ハザマ勤務

妻・静恵、長女・千絵、長男・圭太、母・和枝

主のすばらしさを味わい、 これを見つめよ

木村 静恵



夫の茂昭さんと

私は一九五八年、宮城県石巻市に生まれ、家族は両親と姉と私の四人家族でした。父は公務員でしたが生活は苦しく、家計の足しに母は自宅の一角を改造して小さなそば屋を営み、厨房（ちゅうぼう）から出前までこなしていました。苦しい生活にもかかわらず、父は自分の身の回りの物や趣味、お酒にお金を惜しまない人で、毎日朝から晩まで働き詰めの母はそんな父を言葉で責め、二人の間にはケンカが絶えませんでした。ケンカがエスカレートすると父が大声で怒鳴り、物を投げつけ、暴力をふるい、母が裸足で外に逃げ出すこともたびたびありました。

けれど、翌朝には二人とも何事もなかったかのようにケロッとしていて、今思えばそれはお互いのガス抜きのようなものでそれほど深刻なことではなかったのかもしれません。しかし幼かった私はケンカが始まると恐ろしさでいっぱいになり、部屋の隅で気配を殺し、じつと嵐が過ぎるのを待ちました。また、いつも生活に追

われ疲れている母には、子どもに心を向ける余裕はなかったのだと思います。私はそんな家が大嫌いでした、早く大人になり、家を出て自分の力で生きていきたいとそればかり考えていました、そしてなぜか漠然とながら神様の存在を信じていた私は、「神様、なぜ私はこの家に生まれてこなければいけなかったのですか」と、不満をつぶやいていました。

高校を卒業後、就職のために上京し、同じ職場だった主人と二十二歳で結婚しました。一九八三年の長女千絵の出産を機に、主人の母と同居生活が始まりました、主人は男三人兄弟の長男で同居するのは当然と思っていた。人間的に幼かった私はとても楽観的で、何の根拠もないのに私たちはきつと仲良くやっていけると思っていました。しかし、突然夫を亡くし、中高、大学生の息子たちを育て、また、自分自身を守るために親族以外の人には心を閉ざして壁を作っていた厳しい義母を、私は恐れました。受け入れてもらえな

い苛立（いらだ）ちと落胆は時間と共に大きくなり、お互いの心のすれ違いや日常のほんのささいな行き違いも積み重なって膨（ふく）れ上がっていききました。その頃の私は「神様、結婚したら幸せな生活をおくれるはずだったのに、いつまで私をこんな目にあわせるのですか」と、幼い頃のようにいつもつぶやいていました。

同居生活から五年、私たちの関係は最悪で修復不可能な状態となり、義母は私たちに家を出ていくか、二世帯住宅に改築するかどちらかをせまり、私は迷うことなく家を出る方を選びました。

一九八八年、五歳になった千絵と三歳の長男圭太、私たち四人での新しい生活がスタートしました、今度こそ思い描いていたとおりの温かくて楽しい生活が送れると期待と喜びでいっぱいでした。いつかやってみたいと思っていた趣味の習い事やスポーツ、家族でのキャンプなど予定を書き込むカレンダーには空欄がないほどでした、ところが、ふとしたときに心の中に義母の存在

を感じることがありました、そんなはずはないと打ち消そうとするのですが、すればするほど、その思いは大きくなっていました。義母から解放され、望んでいたおりの生活を手に入れたはずなのに、私の中には相変わらず両親や義母に対する恨みや憎しみ、友人たちに対しての妬(ねた)みや羨(うらや)み、そんな真つ黒い思いがいっぱい詰まっていることを思い知らされ、苦しく、この思いから解放されたいと願うようになり、その頃、子どもたちが通っている幼稚園に集会のご兄弟のお子さんたちもいて、お宅に遊びに行ったり、幼稚園で顔を合わせることがたびたびありました、ご兄弟はいっとお会いしても穏やかで柔らかく私は惹かれるものを感じていました。

あるとき、私は唐突に姉妹に「松田さんはなぜ、いつもそんなに穏やかなんですか？」と尋ねました、姉妹は少し困ったような顔をされて「いえ、穏やかなんじゃないんですよ。でも、もしそう見えているとしたら、そ

れはイエス様が見せてくださっているのだと思います」と言われました。教会も聖書もまったく無縁だった私にはクリスマス以外で多分、初めて聞いたイエス様という言葉でした。そしてそれは私の心の中に驚くほど自然にストンと落ちて、「ああそうなんだ、イエス様なんだ」と素直に思いました。

その後、姉妹は集会や交わり会に誘ってください、よくわからないながらも集うようになりました。集い始めたばかりの頃、あるお交わりの席で一人の姉妹に「あなたは神様を信じていますか？」と聞かれたことがありました。私はクリスチャンとは、清く、優しく、正しく、良い行いをする人だと思っていましたので、真つ黒い心の私には神様を信じる資格がないと思っていましたから「信じたいけど私には信じる資格がないんです」と答えました。するとその姉妹は「資格のないと思う人ほど信じる資格があるんですよ」と言われました。その言葉の意味はまったくわかりませんでした。

が、そのときのことは今でもはっきりと覚えています。

一九九三年三月、ベック兄のお宅でお交わりの機会をいただき、親から愛された思いのないこと、義母との関係に悩み苦しんだことなどをお話ししました。聞き終えたベック兄は小さい子どもの頭をなでるように手を置いて、「イエス様は静恵のことを愛しているんだよ」と言ってくださいました。その言葉を聞いた瞬間、私の中に幼い頃からあった深く暗い穴の中に何か温かいものが流れ込み、溢れて満たされた感じがしました。涙が止まりませんでした。「なぜ私はこんな目にあったのですか」という問いに、「イエス様に会ったためです」と神様は答えてくださいました。

イエス様を信じ受け入れて間もなく、義母の家を二世帯住宅に改築して私たちが戻るといふ話が持ちあがり、一人になった義母は外の人たちと関わるようになり、また、年を重ねて少しづつ変えられていて、義母自身も希望していることでした。私はこのこと

はイエス様がしてくださっていることと確信がありました、これから先のことはわたしが責任を負うから、頑張らなくてもそのままでもいい、とみことばで示されたからです。

一九九四年、新たな生活が始まりました。その後、二〇〇六年に主人がイエス様を信じ受け入れて救われました。

二〇〇八年の秋頃、「イエス様に喜ばれる生活をおくる秘訣」というテーマで何度かメッセージがありました。聞きながら、はたして私はどうなのだろうという思いが与えられました。その頃の私は、義母との関係も接触が少ない分、特に大きな問題もなく、多少のこの世の楽しみも味わいながら漫然と礼拝、集会、祈り会へ行っていました。しかし、自分は罪や十字架についての理解が鈍く曖昧で、信仰の核となる大切なことを知らないのではないか、という思いがずっと前からありました。そしてそのメッセージを機に私は、大切なこ

とを教えてください、と祈りはじめました。

そんな二〇〇九年二月、私は右膝の前十字靭帯(じんたい)損傷のケガを負いました。若い頃からのスポーツで両膝を傷め、四十歳で痛みのひどかった左膝を手術し、そのリハビリのつもりで行っていたスポーツクラブでのエスカレーターしたトレーニングが原因でした。頼りの右膝も傷めてしまい、このまま歩けなくなったらどうしようかと不安を抱えながら四月に再建手術を受けました。

手術の翌日から突然、私は耳の感覚と聴覚の異常、めまい、根拠のない激しい不安と恐怖、パニックなどの症状に悩まされるようになり、その一つひとつが思い煩いの種となりました。メッセージや賛美のCDを聞いても平安なのはその最中だけで、聖書を読んでもみことは心に留まらずに流れ去り、つかまえようとすればするほど、みことは平安も遠くへ行ってしまうのでした。

を共にしましたが、だいぶ回復した義母は二階の自分の住まいに戻りました。病気で弱っていたときの義母はイエス様の話に耳を傾け、お祈りに目を閉じ頭を垂れていましたが、元気になるにつれてイエス様も私たちの手助けも拒むようになり、義母のそんな頑な態度に激しい苛立ちと嫌悪感がこみ上げてくるのです。そのたびに私の中には義母に対してまったく愛がないことを思い知らされ、私の罪は底なしの沼から溢れてくるようでした。イエス様の十字架が目の前に迫ってきて、ただただ悔い改めのお祈りをするばかりで、それが赦されている実感はありませんでした。そんな中、御代田キャンプでのお交わりの席で話を聞いてくださった二人の兄弟が「姉妹、あなたの罪はイエス様が十字架に架かってくださったから、もう赦されているんですよ!」と言ってくださいました。何度も聞いてきたはずの「もう、赦されている」という言葉が、「イエス様」という言葉を初めて聞いたと思ったあのときとまった

夜、病室のベッドの中で、「あのときああだったから」、

「こんなことをしたから」と自分を責め、思い煩いはどんどん大きくなり、常に頭から離れない状態でした。命にかかわるような病の中でも喜んで主を証ししている御兄姉がたくさんおられるのに、私は足の一本で動揺し、イエス様がまったく見えず、信頼もできない、信仰などまったく自分の姿をいやというほど見せられました。信仰のかけらもないのです。惨めでした。「イエス様に喜ばれる生活をおくる秘訣」を知りたい、そうありたいと祈っていたはずなのに、結局私は自分を喜ばせ、自分の計画を第一とし、自分で決めてから祈り、自分の望みを要求する者で、主の秩序を無視し主を畏れない、わがままで傲慢な者であることに気づかされました。それこそが私の罪そのものでした。

その後も主は、それまで漠然としていた罪の一つひとつに光を当ててくださいました。二〇一〇年一月に義母は胃の病気で入院し、退院後はしばらく二階で生活

く同じように、心の中にストンと落ち、罪の咎めから解放された喜びと解放感に満たされ、イエス様の十字架が嬉しくて感謝でいっぱいでした。

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に來られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。(1テモテ 1・15)

私の体のさまざまな症状はその後もしばらく続き、一時は治りたい一心でいくつもの病院を訪ねましたが、あるとき、もうこのままで良い、すべてイエス様におゆだねしようと決心したときから少しずつ良くなってきました。五年たった今も耳の感覚異常があり、眠っているとき以外は不快感がありますが、あのときのことを忘れないようにとの戒めのために、イエス様が残してくださった恵みだと思えるようになりました。

義母はデイサービスやヘルパーさんの助けをかりて、なんと一人で生活していましたが、二〇二年の春頃には体の衰えと認知症が進み、夜も目の離せない状態で、特に主人は心の安まる時がなかったと思います。介護に関して私たちは「致できないときもたびたびあり、お互いに悩むこともありました。家で介護を続けるのは無理と頭でわかっていても、なかなか施設入所への決心がでずにいた主人でしたが、イエス様は思いがけない方法で主人の上に働いてくださり、以前からずっと導きを祈っていた介護施設「そよ風」にその年の八月、入所することができました。「そよ風」には以前から親しくお交わりをいただいていた大江美恵子姉妹がおられ、義母とも面識がありました。美恵子姉妹は義母を、まるで実の妹かのように喜んで迎えてくださり、日に何度も義母の部屋をお訪ねになって、こころ配りをしてくださいました。家にいたときの義母はいつも何かと闘っているように険しい顔をして眉間

には深いシワがありましたが、入所後はシワがみるみる消えて、今まで見たこともないような柔らかい穏やかな表情に変わっていききました。

三ヶ月が過ぎた頃、義母の親族の方たちが面会に来られ、その後の会食の席で三十九年前に亡くなった主人の父の死の原因について話が及んだとき、どうも私が聞かされていた話とは違うようだと感じました。主人と二人になったところで改めて父の死因を尋ねました。主人もはつきりと確認してはいないけれども、もしかしたらという思いとそれを認めたくないという思いとの間で長い間、真実に蓋をして、心の奥にしまい込んできたようでした。私は主人の了解を得て義母に尋ねてみることにしました。

「お義母さん、お義父さんはどうして死んだの？」と聞くと、義母は義父が自ら命を絶ったことを話してくれました。義母のこれまでの人生の歩みを振り返って思ったとき、私は心の底から義母がかわいそう、愛お

しい、申し訳なかったという思いが湧いてきて胸が詰まりました。思わず義母に「お義母さん、ごめんね、こんなダメな嫁で」と言うと、義母は「いいのよ、茂昭が選んだ人だから」。「お義母さん、本当はずっと家で暮らしたかったでしょう?」。「いいのよ、私はここで」。「お義母さん、私はずっとお義母さんと近い存在になったかったんだよ」。「いいじゃない、今は近いから」と言ってくれました。私はオイオイ泣きながらお祈りをしました。目を上げると義母は静かに目を閉じて、祈りに心を合わせてくれているようでした。

泣くのに時があり、ほほえむのに時がある。
黙っているのに時があり、話をするのに時がある。
戦うのに時があり、和睦するのに時がある。

(伝道者 3・4、7、8)

「そよ風」には他にも姉妹たちがおられ、イエス様は

いつも義母を主の交わりの中に置いてくださり感謝です。義母が天国にいる義父との再会のお約束をはっきりと自分のものにできるようにお祈りしています。

まことにわが家は、このように神とともにある。
とこしえの契約が私に立てられているからだ。このすべては備えられ、また守られる。まことに神は、私の救いと願いとを、すべて、育て上げてくださる。

(2サムエル 23・5)

木村静恵

一九五八年、宮城県石巻市生まれ
宮城県立河南高等学校卒
夫・茂昭(しげあき)、長女・千絵(ちえ)、長男・圭太(けいた)、義母・和枝(かずえ)

祈って求めるものは、 そのとおりになります

山田晃



右が晃さん、友人の泉さんと

ぼくは、ふだん吉祥寺集会に集っています。今回は人間には何もできずこの先どうなるのかもわからないこと、しかし神様がすべて最善にしてくださるということを証したいと思います。

ぼくがまだ保育園に通っていたころ、おばあちゃんが腸閉そくという病気になつて大変なことになるしました。お父さんが保育園に迎えに来てくれて、家に帰つてカレーライスを食べていたら、お母さんから電話があつて、これからおばあちゃんの手術をするから早く来てと言われました。

お父さんがぼくとお兄ちゃんを連れて病院に着くと、おばあちゃんはちょうどエレベーターにのつて手術室に行くところでした。おばあちゃんは酸素マスクをつけていました。ぼくが「大丈夫？」と聞くと、おばあちゃんが「ありがとう」と言ってくれた声が今でも頭に残っています。手術が終わつてからお医者さんにあつて三カ月の命と言われて、おじいちゃんも家族も親戚

の人も集会の兄弟姉妹もみんなでお祈りしました。しかし人間には理解できないことが起きました。それは今もおばあちゃんが生きているということです。

祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。

(マルコ 11・24)

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。

(イザヤ 41・10)

神様はぼくたちの祈りをちゃんと聞いていてくださったのです。人間には理解できないとても不思議なことが起きました。そんな出来事を通して、ぼくは神様の力はすごい、ただ神様を頼りに生きることが大切だと思ひました。ぼくの一番好きなみことばです。

わたしはあなたに命じたではないか。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。

(ヨシヤ 1・9)

山田晃

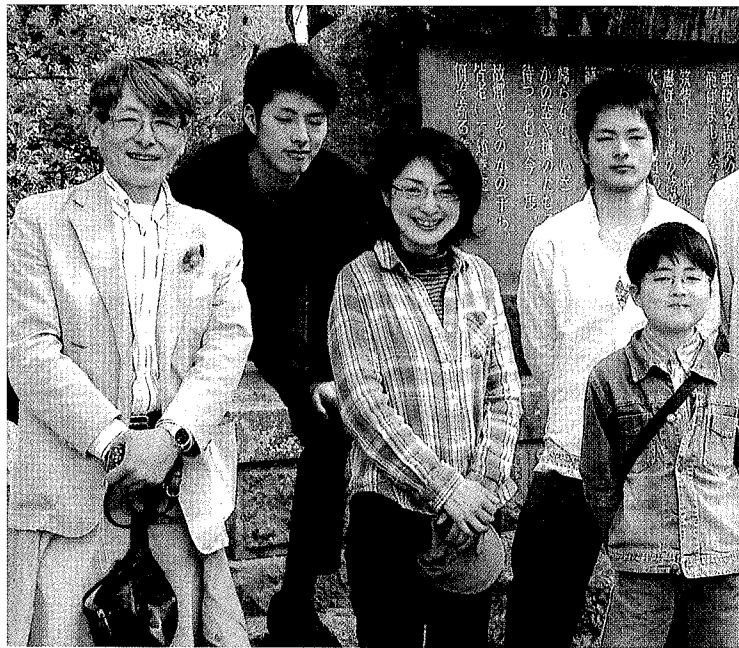
練馬区立石神井台保育園、

練馬区立大泉東小学校六年

父／タン・ジユンボ、母／山田京子、兄／二人

イエス様からの宝物

米倉 泉



右から泉さん、豊さん、お母さまの恵子さん、翼さん、お父さまの眞樹さん

ぼくは毎週吉祥寺集会に集っています。六年生です。五年生のときにも、日曜学校キャンプでお証しをさせていただきましたが、五年生のときお証ししたように、今も週に一回、集会の松見とみえ姉妹にピアノを教えてもらっています。今日は、そのピアノを好きで始めたきっかけをお証ししたいと思います。

ぼくには二人の兄がいます。ぼくの家にピアノがあったきっかけは、ぼくが生まれる一年ほど前のことです。ある日、兄がまだ幼稚園だったとき、「どうしてもピアノが弾きたい!」と、ピアノを買ってくれるように父にお願いしたそうです。しかし、兄はそのピアノを「三日ボーズ」でやめてしまい、それっきり兄はピアノに興味をもたなくなり、まったくピアノに触れなくなってしまうそうです。それから間もなく、一年ちよつとして生まれたぼくが三歳くらいになったときに、ピアノの音がぼくの耳についたそうで、成長するとともに、ぼくはピアノが大好きになりました。四年生のころには、小

学校の秋の音楽発表会でピアノを弾くこともできました。これは、全部がイエス様の備えなんだなあ、いつも弾くときに思っています。

毎日毎日、夜に一回、ピアノの練習を必ずしています。その時間も、先生も、イエス様が備えてくれているんだなど、決して忘れずに、これからもピアノを弾き続けていきたいです。また、ぼくの日曜学校の相棒の山田晃君はヴァイオリンを弾くので、いつかは一緒に演奏できるように、その時間も与えられるように、これからイエス様にお祈りしていきたいです。

最後に、ぼくのいちばん好きなことばです。「恐れるな」という言葉が大好きです。ピアノの練習などで失敗したときは、つねにこの「恐れるな」という言葉を考えています。

いのちの泉はあなたにあり、私たちは、あなたの光のうちに光を見るからです。
(詩篇 36・9)

12 人の証し

Unser Herr Iehu

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。
(イザヤ 43・4)

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。

(マタイ 7・7-8)

米倉泉(よねくら いずみ)

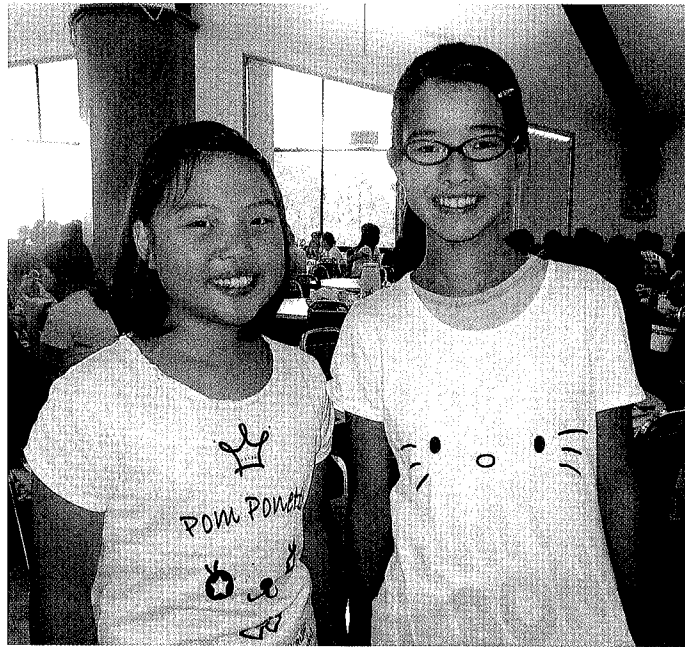
二〇〇三年四月生まれ、東京都出身

西東京市立芝久保小学校 六年

父・眞樹(まき)、母・恵子(けいこ)、長兄・翼(つばさ)、次兄・豊(ゆたか)

みことばのとおりになりました

丸茂 光



右が光さん、お友達の狩俣こみちさん

ふだん横浜集會に集っている六年生の丸茂光です。今回、証しのお話しを受けて、イエス様がどんなことをしてくださったか、思い出せるようにお祈りしました。いろいろなことが思い出されたのですが、その中で二つのことをお話します。

一つ目は、二〇一四年三月の大洗キャンプのことです。家族でキャンプに行くことが決まって、私自身もすごく楽しみにしていました。しかし、前日の午後に父に緊急な仕事が入ってしまい、99%行かないという状態になってしまいました。私はがく然としました。また、心の中に神様に対しての怒りがわいてきました。そんなとき、部屋に飾られていたみことばが目に入りました。

神のなさることは、すべて時になつて美しい。

(伝道者 3:11)

いました。しかし、私はさそつてもらえませんでした。私はすごく悲しくなりました。学校にも行きたくなくなりました。それどころか、私が話しかけると、いやな顔をされたりするようになりました。しかし、イエス様は助けの手を与えてくださいました。同じクラスの二人の子が、「私はパーティーに行かなくていいから、いっしょに遊ぼう」と言ってくれました。私はその言葉を聞いたとき、イエス様が助けてくれたと思いました。

あなたがたのあつた試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

(1コリント 10:13)

二つ目は、五年生の冬のことです。クラスの中心の女の子が放課後にクリスマスパーティーを開こうと計画していました。クラスの大半の人はパーティーにさそわれて

12 人の証し

Unser Herr lebt



左が実結さん、右が妹の真叶さん

主は、教えてください、
守ってくださいます

植木 実結

かけてくれた子とは、今はちがうクラスになってしまっ
たけれど、今でもいつしよに遊んだりします。イエス様
は、見えないけれど、困ったときは助けてくださいます。
これからもイエス様を信じ続けたいと思います。
最後に好きなみことばを三つ読みます。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちに
あるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くして
くださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのす
べての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あな
たのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみ
との冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満た
される。
(詩篇 103・1～5)

主は、あなたを守る方。主は、あなたの右の手を
おおおう陰。昼も、日が、あなたを打つことがなく、夜

も、月が、あなたを打つことはない。主は、すべての
わざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守
られる。主は、あなたを、行くにも帰るにも、今より
とこしえまでも守られる。
(詩篇 121・5～8)

神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちた
りて、すべての良いわざにあふれる者とするために、
あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる
方です。
(2コリント 9・8)

丸茂光

二〇〇三年 神奈川県横浜市生まれ

横浜市立三ツ境小学校六年

父・哲明(てつあき)、母・榮里子(えりこ)、姉・愛(あ
い)、兄・寛太(かんだ)、姉・望(のぞみ)

私が四年生のとき、いつしよに登下校していた友だ
ちとちよとしたトラブルがおき、悪口を言われたり、
意地悪をされたりするようになりました。最初は「す
ぐにおさまるかな」と思ったのですが、なかなかおさ
まらず逆にひどくなっていきました。私は、苦しかった
ので別の友だちと帰ろうとしたのですが、意地悪をし
ている友だちが、「どうして別の友だちと帰るのか」と
嫌な顔をするので、別の友だちと帰ることもできませ
んでした。それどころか、別の友だちまでいつしよになっ
て意地悪をするようになってしまいました。私は誰に
も相談できませんでした。

ある日、お母さんが私とその友だちの間にトラブル
があることを知り、くわしいことを尋ねられたので、
全部話しました。そして最後に、その友だちたちがこ
れ以上意地悪をしませんようにと共にお祈りしまし
た。

次の日が学校の教育相談の日だったので、お母さん

が先生にそのことを話してくれました。そして、私が病気で学校を休んだときに、先生が友だちたちと話し合ってくれたようで、病気が治って登校した日に友だちたちが謝ってくれました。

イエス様が、私が苦しんでいることをお母さんに伝えてくれました。そして、イエス様が守ってくれました。その後、意地悪をした友だちのうちの一人は、私のわがままなところが嫌で意地悪をしていた、ということが分かりました。それも、イエス様が私のいけないところを教えてくださいました。イエス様、ありがとうございます。うございます。イエス様が早く来てほしいと思います。私は「イエス様がいちばん」という歌が一番好きです。歌の中に出てくる「さみしいときにも、悲しいときにも、泣きたいときにも、さけびたくても、意地悪されても、苦しめられても、…イエス様がいちばん」という所が好きです。どんなときにもイエス様が守ってくれると思えるからです。

イエス様をまだ知らない、信じていない友だちが、イエス様を信じてイエス様を愛するようになってほしいと思います。

今、夜寝る前に詩篇を1章ずつ読んでいます。詩篇は、困ったときや苦しいときに励まされると聞いて読み始めました。その詩篇の中で好きなみことばです。

夕暮れには涙が宿っても、朝明けには喜びの叫びがある。
(詩篇 30・5)

いのちの泉はあなたにあり、私たちは、あなたの光のうちに光を見るからです。
(詩篇 36・9)

わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。あなたのおしえは私の心のうちにあります。

(詩篇 40・8)

主にあって、私はみことばをほめたたえます。

(詩篇 56・10)

まことに、あなたのさとしは私の喜び、私の相談相手です。
(詩篇 119・24)

主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。
(詩篇 121・7)

私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。

(詩篇 139・24)

植木実結(みゆ)

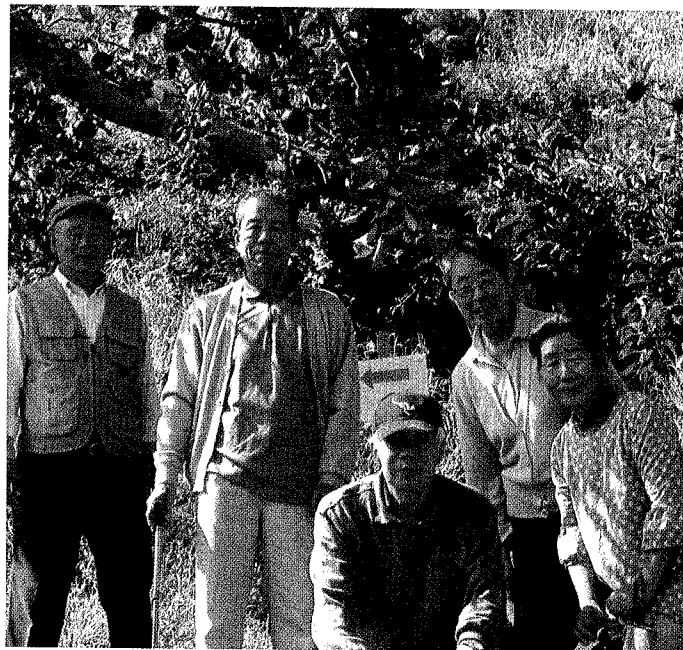
二〇〇二年十二月二十五日生。

神奈川県横浜市立平戸小学校六年

父：靖孝(やすたか)、母：枝利奈(えりな)、
妹：真叶(まな)

主は、こんな私にも 働いてくださった

吉岡 勝義



左から2番目が勝義さん、右端が順子さん、みなさんと

一 生い立ち

私は、一九四二年（昭和十七年）九州の片田舎、宮崎県西都市に、七人兄妹の三男として生まれました。前年の十二月、日本とアメリカは戦争に突入していったので、父と長兄は招集され戦場に行くという大変な時代でした。

私が物心つくころは戦後の疲弊のさ中でありました。家は農業を営んでいましたので、食べ物にはあまり困りませんでした。が、経済的には貧しい生活でした。家族の状況はと申しますと、父母は早朝から夕方まで、毎日休みなく働き家族の生活を支えていましたので、子どもと遊んだり世話をする暇はほとんどなく、学校の参観日には、祖父が来てくれることもあったこと、おやつなどは祖母が作っていてくれたことを覚えています。父は、怒られたことがないくらい温厚篤実、そして母は明るく前向きな性格でしたので、平和で兄弟仲の良い家庭でした。

育った環境は、昔ながらの伝統と風土、文化をその

まま継承した土地でした。春秋の祭りや弔事を行う神社やお寺はありましたが、本当の神様の話を聞いたり見たりするチャンスはまったくないようなところでした。

私はそのような中で、高校卒業までを過ごし育ちました。私は、まわりから「勝っちゃん」は真面目で、竹を割ったようにまっすぐじゃ」と言われていました。そして母が私の子どもの頃言っていた「神様はいつも見ちよりやるよ」という言葉が何かの度に思い出されて忘れられず、子どもながらに「独りよがりの善」を行っていたので学校では優等生でした。そのような中、将来のことを考える時期となったのですが、親のすねかじりをして、お金のかかる大学にはいけないと思っていました。また、自分の将来、大人になってからの仕事については、「あまり人がやりたくない仕事だが、だれかはやらなければならないような仕事をやってみたい」

と漠然と思っていました。

そのような時、私は、高校の掲示板に「防衛大学校募集要綱」の張り紙を見て、これを受けてみようと思いました。そして一九六〇年（昭和三十五年）四月、防衛大学校八期生として入校しました。

四年後の一九六四年三月、卒業と同時に航空自衛隊に幹部候補生として入隊しました。東京オリンピックの年でした。それから私は一九九七年、五十五歳余で定年退職するまでの約三十三年間、仕事仲間に関きますと、頭に「〇〇」の二文字が付くぐらい「真面目」に職務に励みました。この間約十六回の転勤とほぼ同じくらいの回数の転居で、北は北海道から南は沖縄まで、各地で勤務しました。

二 私の罪

二つ目の勤務地三重県津市の近くの笠取山というレーダーサイトに勤務しているとき、私の上司の奥様

と家内の小学校時の恩師の紹介で見合いをし、順子と結婚しました。私は二十七歳、家内は二十二歳の時でした。この時家内は、既にイエス様に出会い信じていたのですが、私はその意味合いも分からず、また知る努力もせず無関心で聞き流していました。その後、私たちは三男一女の四人の子どもを授かりました。私は前にも述べましたように仕事一途の人間でしたので、子育てはほとんど家内任せでした。休みにも子どもと一緒に遊ぶことはあまりありませんでした。子どもたちもさみしかったと思いますが、家内は文句も言わず、せつせと全力で子育てに没頭していたと思います。

最近になって私は、私の子どもたちが子育てで苦勞している姿を見るようになりました。その大変さを理解できるようにになりました。そして、家内も愚痴として言えるようになったのか、「子育ての大変さが分かるでしょう?」と打ち明けています。

当時私は、「自分が毎日働いているから、お前たちは

生活できているんだ!自分が好きなように過ごすのは当然だ!文句は言えないだろう!」と思っていましたので、それは態度にも表れていたと思います。このような私の態度は「家内の信じるイエス様」に無関心だったことと合わせ、本当に「わがまま、身勝手、高慢」と言わざるを得ません。家内や子どもにも感謝の一言も言えなかった私は、心の狭い者でした。

結婚から二十数年、私は二、三年の間隔で各地に転勤を重ねまして、五十歳に達した頃沖縄の那覇に勤務することになり、単身赴任することになりました。家内はこの頃、キリスト集会に集っていましたが、私の単身赴任が終わるまで自宅を集会の場所として使いたい、と相談してきました。私は相変わらず神様には無関心でしたが、祈りの場所として提供することに異論はなく、二つ返事で了解しました。集会は日曜日に行われていましたので、休暇で帰っている時の集会には私も参加させて頂く機会がありました。集われ

ていた皆様は明るく優しく親しみ深く迎えてくださいましたので、福音メッセージなども聞かせて頂いていましたが、まったく分かっていませんでした。しかしその集会に参加させていただいた中で、イエス様について私なりに教わるのが二つありました。

その一つは、イエス様は神様と人間の間をとりなしてくださる方だということです。人間はどんなに努力しても、勉強しても、鍛えても、どうすることもできない隔ての壁や淵が神様との間にあるということです。しかしイエス様は、人と神様の間を取りなしてくださるお方だということでした。

もう一つは、「吉岡さん、これから人生の長い間に、もしも苦しいこととか困ったこと、辛いこととかありましたら、騙されたと思って、『イエス様本当にこの世にいらっしゃるのならこの私を助けてください』と祈って見てください」と言ってくださった兄弟のお言葉です。

私は十八歳で田舎を出てから三十八年間、体は健

康に恵まれました、一度だけ感染症による高熱で、三日ほど入院し休んだだけでした。退職後、引き続き通信機器メーカーに勤務しましたが、健康は続きました。毎年の健康診断や人間ドックの検査結果も特別の医師の所見などもなく良好でした。

人の歩みは主によって定められる。人間はどうして自分の道を理解できようか。(箴言 20・24)

私は、健康を当然のことと思いがつていました。そのためか六十歳を迎えた頃の健康診断に血圧の高い所見を頂いたのですが、そのことを留意して専門医に相談して管理するなどもせず、好きなスポーツと、スポーツクラブで汗を流し、夜はビールと焼酎の晩酌で渴いた喉をうるおわせて、毎日をこの世の春とばかりに楽しく過ごしていました。

この健康は自分の日頃の努力の結果とばかりに謳

歌(おうか)していました。この体に生んでくれた両親、私の健康を考えて毎日食事を作ってくれている家内に感謝することもなく、更には創造主なる神様への感謝など思いもいたらない、身勝手な高慢な者でした。今になって考えてみますと、私は、聖書に言う罪を重ねながらも、それを罪とは気付かない者でした。

彼らの最後は滅びです。…彼らの思いは地上のことだけです。
(ピリピ 3・19)

三 生まれて初めての祈り

二〇三年七月三十日夜十一時頃、私の体に異変が起きました。

私は自宅の居間で、机に座りパソコンで資料を作成していました。傍らに焼酎のお湯割りを置いて、最高の良い気分には浸っていました。作業が終わり、後片付けのため立ち上がって動こうとしましたところ、左足

呑み込みも不自由を生じていましたので、鼻から管を通して胃に液体で流し込んでいました。腕には薬の点滴もしていましたので、脇から見てもまったくの重病人だったと思います。

発症から八日目くらいの八月七日夜ベッドに横たわったまま、血圧が高めだったのに放置したこと、反省やらこれからのことなど考えながら、何もかもが情けなく空しく「絶望のどん底」に落ちていきました。

そんな中、二十年前の川越集会の傍(かたわら)で「吉岡さん、将来苦しいこと、辛いこと等あったら、祈って見てください」と言ってくださった言葉を思い出し、「イエス様、本当にこの世にいらっしゃるのですしたら、この私を助けてください」と心の中で生まれて初めて、祈り(叫び)しました。

四 イエス様のお働き

そうしましたら、なんだか絶望感が和らぎ、体も軽

の裏が床にくっ付いたようになりました。ただの痺れではなく、初めての経験であり足の異変でした。この時、先日のNHK脳梗塞番組を思い出しました。そして、一刻も早い処置を要する事態だと直感しましたので、二階にいた家内に携帯電話で、体の具合がおかしいと伝えました。家内はびっくりして、すぐ降りてきて様子を見て119番に電話をしてくれました。救急車は間もなく到着し、救急病院へ搬送され、慌ただしく検査・処置が行われました。医師の最初の診察時は左手・足は良く動いていましたので、ひと安心し、眠気に誘われました。ひと時を置いて目覚めたところ、あれだけ動いていた手足が既に思うようには動かなくなっていました。その日からリハビリも始まったのですが、ベッドに横たわったまま何もできませんでした。

体は左半身ますます動かなくなり、左肩、左腿は寝返りしても、そのまま残っているような感覚となり、自分の身体とは思えないような状態でした。食物は

なくなったような不思議な気分になりました。翌朝家内はいつもの九時ごろ見舞いにきてくれ、「集会の兄弟姉妹からもらったよ」と言ってカードを渡してくれました。次のみことばが与えられました。

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさらない。(詩篇 55・22)

わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。(ヨハネ 15・5)

不思議なことに、最初のみことばは、私のメールに送られてくるその日の朝の「日々の言葉」でもありまし

た。本当に信じられないような偶然が起き、昨夜の祈りに対するイエス様のお答えとしか思えない不思議な出来事でした。

その日のリハビリは、午前と午後二回ずつ、それぞれ腕と足を中心に行われました。足の時、療法士さんから「少し歩いてみましょう」と言われ、私は足首にプロテクターを付けてではありましたが、二、三メートル自分の足で歩きました。感激の瞬間でした。療法士さんは「吉岡さんどうしたのですか？この調子で行きましよう」と褒めながら激励してくれました。本当に夕べの祈りと一夜明けた朝の結果は信じられないような嬉しい不思議でした。しかし、その後は急激な進展はなく、歯がゆいものでしたが、心には不思議なほどの平安がありました。

九月二十日にはベック兄弟と野田姉妹が私の入院中の病院を訪ねてくださいました。ベック兄には二男と三男の結婚式の司式を執り行って頂いたこともありました。

最後にベック兄が訪ねてくださった時の祈りで終わります。

愛するイエス様

私のわがままのために、代わりに罰せられ

死なれたことを感謝します。

あなたの流された血によって、すべてのあやまちが

赦され忘れられていることも感謝します。

あなたを信じますから、

死んでからさばかれることがないことも感謝します。

あなたを信じる者は、死んでも生きると

約束されていることも感謝します。

死ぬことは終わりではありません。

あなたと一緒にいることです。

私の国籍は天にありますから感謝します。

今からのことすべて、あなたにおまかせします。

あなたの御名によってお祈りいたします。アーメン。

り、数回目の面会でしたが、溢れる程の満面の笑顔で、ベック兄の背後には栄光が見えたように思いました。その時のことは忘れられません。私はベック兄に兄弟姉妹方から頂いたカードのことその後の体調のことなど、お話ししました。ベック兄は、次のようにおっしゃいました。「勝義、そのようなことばがあるね、本物は宗教ではないよ、お金ではないよ、物でもないよ。『ごめんなさい、このわがままな私を赦してください』と祈ればいいんだよ、今のことをくよくよししないで、明日に希望を持って明るく生きなさい」と、そして、自分の後をついてくればよいと、一緒に祈ろうとおっしゃってくださいました。

その後、左足も少しずつ動くようになり、杖をついて、ゆっくりですが、二、三キロメートル程は連続して歩けるようになり、左手も少しずつ動くようになっていきます。そして一時の絶望から希望と平安の中に過ごせる毎日を与えられています。

吉岡勝義(よしおか かつよし)

一九四二年宮崎県西都市生まれ、

地元の小中学校を修了、県立妻高等学校、

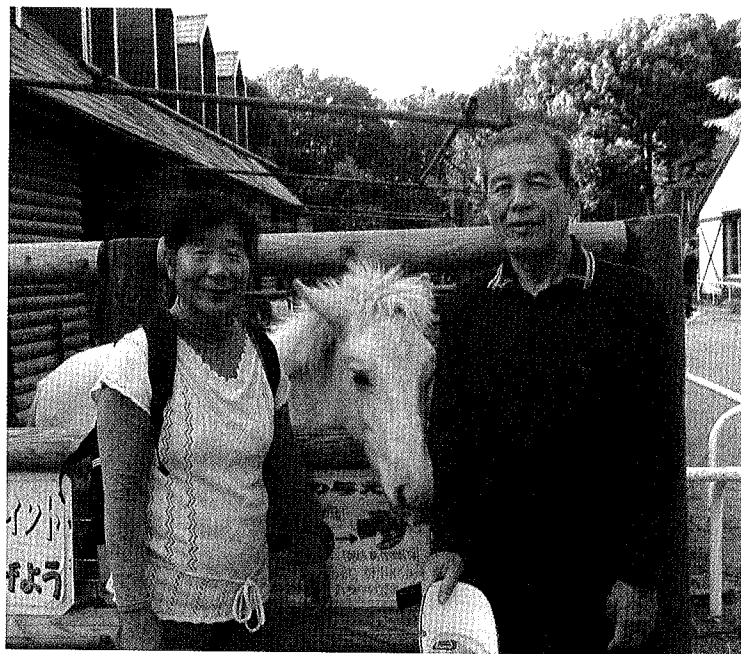
防衛大学校卒

航空自衛隊、長野日本無線(株)、(株)建電設備退職

埼玉県川越市、在住

憩いの水に導かれて

吉岡 順子



夫の勝義さんと

私は三人姉弟の長女として、一九四七年に三重県津市で生まれました。実家のまわりには親せきや昔からの知人も多く、いつも人が出入りしていて、母はその応対に追われていました。父は地元の農協を背負って立つモーレッツ仕事人でした。

家の廊下伝いに「離れ」があり、そこにおはなさんというおばあさんが間借りしていました。年子で弟が生まれたこともあり、おはなさんが私の母親代わりで、私は「ばあちゃん、ばあちゃん」と慕っておりました。私が外から帰ると、井戸から水を汲んで足を洗い、夜は、おはなさんの布団で背中をさすってもらい眠りました。おはなさんは、私のわがままも含め、すべてを受け入れてくれました。ばあちゃんが大好きでした。

五歳のある日幼稚園から帰ると、おはなさんの姿がありません。「ばあちゃんは倒れて病院に入院した。もう帰ってきやへん」と母から聞いたときの強烈なショックを、今もはつきり憶えています。

クを、今もはつきり憶えています。

その日を境に私の待遇は激変しました。今まで世界の中心にいた私が、忙しい両親には相手にされず、関心を持ってもらえず、迷子になったような不安と寂しさを抱えておどおどびくびくし、母のそばから離れることができませんでした。いつもぐずぐず言って、母を困らせていました。父に叱られ、母に叱られ、「お前はあかん奴や！」が、私のトレードマークでした。いつも不安と恐れと劣等感が私を支配していました。

成長し、自分や周りを客観的に見るができるようになったとき、一つの結論を出しました。「自分の存在そのものが罪であり、そこにいるだけで嫌悪される存在。私はゴミ」と。親が私を否定する理由が、ここにあったと納得しました。

消えてなくなる以外になかったのですが、死ぬ勇氣はなく、この有害無益な私が、どうしたらこの世で辛うじてでも生きていけるのかを考えたとき、自分でな

い自分、偽りの自分を演じるしかない。と決意しました。

短大を卒業し、病院の栄養士として働き始めました。生きるための鉄則（即ち、自分でない自分を演じて生きる）をしっかりと握り、栄養士五人の中の関わりが始まりました。自分を偽って、寛容、親切、謙遜、明朗の仮面をかぶり、毎日十時間近く五人一緒にいることは苦しく、緊張と疲れの中でメッキは少しずつ剥がれていきました。天真爛漫（てんしんらんまん）な同僚への嫉妬心、劣等感。自分を偽っていることへの罪悪感。わけのわからない怒りが、私を支配し、追い詰められていきました。

断崖絶壁にいました。四面楚歌、袋小路でした。井戸の底の暗闇の中で、膝を抱え、沈み込んでいる自分がいました。病院の一角に、大きなゴミの山がありました。私は何重にもカビの生えた腐ったパンであり、あのゴミの山に捨てられる以外ない者でした。そしてついに、「自

分を偽って生きる」道が行き止まりであるとはつきりわかったとき、生きる道はなくなり、立ちすくみました。

そのとき突然、私の足元から、見えない無数の針が出てきました。二本の足を置く場所さえなくなり、突き出てくる無数の針の恐怖と痛みの中で叫びました。「助けてください！私は死んでもいいです。でも魂だけは助けてください！」。魂があることさえ知らなかった私が、どうしてこんな叫びをしたのかわかりません。魂の死の恐怖におののきました。

その直後、斜め上の方から「聖書を読みなさい」という声が私の耳に届きました。それは強い促しであり、暗闇の中のたった一つの光でした。何としても聖書を読もう！と強く心に思いました。そして知ったのです。罪の塊である私を愛し、何一つ咎めず、赦してくださいの方がおられることを！人生最大の出来事でした。

聖書には神の愛と赦しが満ちており、特にルカ伝15

を喜び、僕（しもべ）ではなく子として、破格の場所に置いてくださいました。地獄から天国、乞食から王子への転換でした。

ある日ふと気づきました。「あ、私の魂が生きている！」。腐ったパンが、食べられるパンに変わっていることにも気づきました。そのときの静かな喜びを思い出します。

なぜ私は赦されたのか？なぜ私は、無数の針の地獄から逃れられたのか？それは、後になって知りました。イエス様が、私に代わって死んでくださり、あの恐ろしい魂の死をも引き受けてくださったからでした。

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそのむぎの罪のために刺し通され、私たちの咎のために碎かれた。彼への懲らしめが私たちに平安

章の放蕩息子は私そのものでした。

「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前には罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。」ところが父親は、しもべたちに言った。「急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。」

(ルカ 15・21～24)

あの無数の針の地獄の恐怖の中で、完全に捨てられ消し去られる者の悲痛な叫びを、父なる神は憐れんでくださり、光の中に移し替えてくださり、父の家に迎え入れてくださいました。私を何一つ咎めず、私の帰り

をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行つた。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

(イザヤ 53・4～6)

こうして私は神の愛と赦しをいただきました。父と母への憎しみからは長い間、解放されませんでした。神さまに、莫大な負債を免除してもらいながら、父母のわずかな負債を赦すことのできない者でした。でもついに、その解放のときが、思いがけない方法で与えられました。

四十歳でわが家を購入したとき、両親はお祝いとして数十万円を送ってくれました。全く期待していませんでした。お礼の手紙を書かなければと机に向かいました。両親への感謝を探す作業をしました。両親は、いただいた贈答品や子供のおやつをよく我が家に

送ってくれていました。また四人の子供たちの夏休みなどは長期で預かってくれて、私は命の洗濯をすることができました。私たちが家を買えたのは親のお陰でもあった、と心から思うことができ、感謝の手紙を書き終えました。書き終わったとき、両親への温かい思いが私を満たしていました。自分でも驚きました。その手紙を受け取った両親の態度にも変化が現われ、両親との間にあった見えない溝が埋められていきました。長く私の中に居座っていた憎しみの塊が消え去りました。私の体を強く縛っていた縄目から解き放たれたような感覚でした。

主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。

(ルカ 4・18～19)

た。残された時間がなかったので、ベックさんのお疲れも顧みず、なりふり構わずお願いしました。ベック兄は、非常識なお願いを快く引き受けてくださり、そのまますぐCDに声の手紙を吹き込んでくださり、従姉に送りました。

憲一さんはその三週間後に亡くなりました。以下、憲一さんの死後、従姉が送ってくれたメールの一部を引用します。

「その後、少し持ち直し、病室に戻されました。そのときも看護師さんに、殺してほしいと訴えていたと主治医から聞きました。娘にも安楽死を願うメールをしていました。それ以前にも同様のことは度々ありました。iPS細胞からの治療薬が間に合わないことがわかり、絶望したのです。テレビも見なくなり、好きだった裕次郎の唄も聴かなくなりました。そんなときにベックさんのCDです。初めて聴かせたとき、真剣な表情でした。『明日も聴いてみる?』と聞くと、う

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

(ピリピ 4・6～7)

二〇一三年七月二十六日、三重県に住む従姉の夫、憲一さんが筋委縮性側索硬化症(きんいしゆくせいそくさくこうかしょう)という病気で亡くなりました。六十八歳でした。彼は不治の病に絶望し、「殺してくれ!」と医者や家族に訴えていることを、お見舞いに行つて初めて知りました。死が近いことも知りました。彼が絶望の中で死を迎えることを思うと、いてもたってもおられず、みことばやCDを送りました。七月五日の家庭集会で、憲一さんへの声の手紙をベックさんにお願ひしてみよう、という思いが突然湧きあがりまし

なずき、何か救われたように感じました。娘も息子も協力して、ほとんど毎日聴かせました。今まで、死んだ後のことを教えてくれる人はいませんでした。とても安心したのだと思います。呼吸も苦しく、話すこともできなかつたけど、私たちが病室に行ったときや帰るとき、左手を挙げて『ありがとう、またね』を伝えてくれました。絶望の中、「筋の光をいただいたと思っています。ベックさんからの教えの言葉」へりくだつて赦してください。不完全です。ごめんなさい。助けてください。感謝します』を札にして、憲一の首に下げ、いつも目につくようにしておきました」というメールでした。

イエス様は、憲一さんの魂に生きて働いてくださったのだと知りました!

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる

者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からのちに移っているのです。

(ヨハネ 5・24)

憲一さんが召された四日後、二〇一三年七月三十日夜中に、主人は突然、脳梗塞を発症し緊急入院しました。思いもよらない出来事でした。体力では誰にも負けない人でした。左半身がまったく動かず、寝たきりになる不安と絶望の中で、主人は生まれて初めて祈ったそうです。

イエス様はその祈りに答えてくださり、聖書のみことばが生きて主人に臨みました。兄弟姉妹からいただいた聖書のみことばが、主人に語りかけてくれたのでした。でも、主人は、私には何も話さず、私はそのことを知りませんでした。

その二週間後、川越の家庭集会の折にベックさんがお見舞いに来てくださいました。主人が、その証しを

ベックさんにしているのを聞いて、私はそのとき初めて、みことばが主人に臨んだことを知りました。地面に足がつかないほどうれしかったです。

みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえない者に悟りを与えます。
(詩篇 119・130)

一つのメッセージがきっかけで、四〇五年前から朝一番に主に感謝と賛美を捧げる時間を持つようになりました。生きる価値もない私に、無条件の愛と赦しをくださり、死からのちに移し替えて、「あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」と、愛のまなざしを注いでくださるイエス様に応答したいと思いました。ほかの一つ憶えのように、初めの愛を思い出し、感謝と賛美を捧げています。自分がどんなに低い者であるか、その位置も確認できます。また、極度に人を恐れる私でしたが、その恐れが小さくなっている自分にも気が

ついています。

ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。

(ヘブル 13・15)

主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい。主が町を守るのでなければ、守る者の見張りもむなしい。あなたがたが早く起きるのも、おそく休むのも、辛苦の糧を食べるのも、それはむなしい。主はその愛する者には、眠っている間に、このように備えてくださる。

(詩篇 127・1・2)

吉岡順子

一九四七年、三重県津市生まれ

県立津高等学校、瑞穂短期大学家政科栄養学科卒

夫・勝義 三男一女 孫九人

信じる者になりなさい

後藤 隆



後列右から4人目が隆さん、みなさんと

1 吉祥寺キリスト集会に集うきっかけについて

私が一九七三年に入社した小野測器という会社は、今は自動車会社を相手に計測器や制御機器を造って納めています。入社当時は製鉄所などの鉄鋼関係もお客様でした。私は鉄鋼関係向けに計測制御装置の電気回路を設計し、調整するエンジニアでした。ところが、入社してすぐにオイルショックがあり、私は大阪営業所に一年半ほど出向しました。この時、営業所の女性事務員の友達で、皆から「おねえちゃん」と呼ばれる人に出会いました。後に、おねえちゃんがクリスマスチャンになり、その人から吉祥寺キリスト集会を紹介して貰うことになるのです。

東京に戻って、再び電気回路設計の仕事に就きました。一九七六年に自動車用の薄板を造るための圧延ローラーの隙間を制御する機械を中国と韓国に輸出することになりました。機械部分は別の会社が造り、私たちは制御の電装部分を受け持ちました。海外輸出は

初めてで、しかも、中国と韓国での工程時期が重なってしまい、本来の担当者は中国に行き、私が韓国に行くことになりました。

韓国の浦項製鉄所の現場事務所に働いていた日本語の分かる若い女性が、私と結婚することになる人でした。そのころ、韓国では一般人の海外旅行は禁じられていて、仕事で招待されるか、在日の親戚がないと日本に来ることができませんでした。

現地の日本大使館に出向いたり、日本にある韓国の領事館に行ったりして、婚姻したという文書上の事実を整えて、一九七七年末に妻となる人を日本に呼ぶことができました。日本に来たばかりの妻が心配で、私の実家近くにアパートを借りて住むことにしました。吉祥寺集会にも近い、武蔵境駅の北側で、駅から歩いて五分ほどの所でした。周辺には後藤一族が点在しています。

武蔵野市桜堤で暮らし始めて長女も生まれました

が、妻にとって日本での暮らしは寂しかったようです。近くにある日本キリスト教団の教会に通ったこともありませんでした。しかし、交わりもなかったので、続きませんでした。

妻が来日したのは大阪の伊丹空港でしたので、私が知っている唯一のクリスマスチャンで、おねえちゃんと呼ばれていた大阪の姉妹を最初に紹介しました。さびしかった妻は、彼女と時々電話連絡をしていたようです。妻は、彼女が集っていた集会の話を聞いて、「あなたが集っているところは楽しそうなので、私たちが住んでいる近くに同じようなところがあれば教えて欲しい」と頼んだのです。しばらくして、郵便が届き、中に聖書と聖歌と賛美歌集と吉祥寺キリスト集会の住所が書かれた手紙が入っていました。一九八〇年の暮れのことです。私たちは、一九八二年の元旦から吉祥寺キリスト集会に行こうと決めて、一月一日の九時ころ家を出ました。住所を頼りに集会を探しましたが、なかなか見つから

ず、集会にたどり着いた時には昼近くになっていました。当時の元旦礼拝は朝七時から始まって九時前には終わっていましたので、すでに誰もいませんでした。私たちは、二月四日の日曜日に再び行くことにしました。とは言っても私は、単に妻の道案内で付き添いでした。集会に来て、教団の教会との違いに戸惑い驚きました、十字架もなければ、パイプオルガンもなく、椅子は折りたたみのパイプ椅子、女性はベールをかぶっていました。しかも男の人たちは前にいて、後ろは女性ばかりです。集っている人の年代は若い人から年配の方まで偏りなく、多くの人たちが集っていたのです。後ろの二、三列は空いていたので、そこに座りました。礼拝の終わりに、私と同じような年代の兄弟が声をかけてくださいました。教団の教会と違って、明るく活き活きした人たちの集まりでした。

私は、集会に来てから、真剣に聖書を読み始めました。しかし、私は子供の頃から科学者にあこがれてい

て、科学が進歩すればなんでもできる、科学は万能と考えていて、学校のクラブ活動は小学生のときは理科部、中学は化学部、高校は物理部、大学での学科は物理工学科といった具合に目に見える現象だけを捉えて考えてきました。私にとって、聖書に書かれている記事は信じられないことばかりでした。創世記を読み始めて、進化について書かれた箇所を見てみました。単純な細胞から複雑で高度な生命体に進化する説は数十ページにわたって書かれていたのに対して、最初から多くの種が存在していたという創世記の記事と同じ内容のことは「種の不変説」として短く書かれていました。

創世記から読み始めて、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記と読んでいくのですが、同じような記事が繰り返して出るので、なかなか先に進みません。そんなとき、ある兄弟から新約聖書を平行して読むこ

とを勧められ、マタイの福音書からも読み始めました。そこには、イエス様が五個のパンで男だけでも五千人を満腹させ、あまったパン切れで十二の籠がいっぱいになったなど、学校で習った「質量不変の法則」に反するようなことや、病氣の人を治したり、水の上を歩くなど、まったく信じられないことが書かれていました。

私は、イエス様に関する話は作り話ではないかと疑いました。高校時代の世界史の教科書を開きました。すると、生まれた年は不明、死んだ年も疑問符付きの三十年で、「イエスが布教活動を行なった」とありました。

当時、吉祥寺キリスト教会には私と同年輩の人たちが何人かいて、彼らはイエス様を信じているのに、まったく信じられない自分は何か損をしているように思いました。私は、ある兄弟に言いました。「私はイエス様を信じたたくても信じられません」。そしたら、その兄弟から「そのままの氣持を祈ったらいいでしょう」と勧め

められました。信じられないイエス様に祈るのはおかしいかもしれませんが、その時から私は毎晩寝る前に祈ったのです。「イエス様、私はあなたを信じる事ができません。信じたいけども信じられません。信じられるようにしてください」

2 祈りがきかれる体験

五月の連休に、妻の姉が韓国で結婚するので、私たちも韓国に行くことになりました。二人目の子が妻のおなかの中にいて、直前に破水したこともあって、医者からは止められていたのですが、無理を押して行くことにしました。アパートからタクシーで成田空港まで行き、成田を飛び立ってから約二時間、韓国釜山の空港に着いているはずなのに、飛行機は着陸しません。一歳半の長女は機内に飽きてしまっておとなしくしていません。そんな時、機長からアナウンスがありました。「霧がひどくて、視界がありません。あと二回旋回し

て視界が晴れなければ、成田に引き返します」とのこ
と。

大変なことになったと思いました。そのとき聖書に
書かれていることを思い出しました。「信じて祈れ
ば、山も海に入る」、「わたしの名によって求めるなら、
わたしはそれをしましょう」。祈ろう！

毎晩「信じられるようにしてください」と祈っては
いましたが、この時は必死にイエス様に祈り求めたの
です。すると、すぐに機長からのアナウンスがありま
した。「視界が急に晴れました。これから着陸します」
空港で私たちを待っていた妻のお母さんも「今日は
来られない」とあきらめていたそうです。それまで、空
港まで飛んできた飛行機は着陸することができず、次
から次と引き返していき、着陸する飛行機も離陸す
る飛行機もなかったとのことです。実際には、私たちの
乗った飛行機以外に、もう一機だけ着陸した飛行機が
あったと、あとで聞きました。機内には、私以外にも

祈っていた人がいたかも知れませんが、主イエス様は生
きておられ、私たちの祈りに応えてくださる方である
ことを、はつきりと知ることができました。この時から、
何でもイエス様に祈るようになりました。

六月に新幹線で福山に出張したときのことです。
東京駅で新幹線に乗り、指定座席まで来たのですが、
その日は朝から下痢気味で、痔が出てしまい痛くて座
れません。床に横になりたいほどでした。四時間半立っ
たままはつらすぎます。イエス様に祈ろうと手を組ん
で、「イエス様」と名を呼んだ瞬間です。痛みがスーと
消えたのです。いつもどおりの体に戻りました。願う
前にはかなえられたのです。祈りは感謝に変わりました。
た。

同じようなことは、長女が高熱でひきつけを起こし
そうになったときも体験しました。目は白目になり、
手は痙攣（けいれん）していましたので、イエス様に祈
り求めると、娘は何事もなかったようにすやすやと寝

ているのです。他にも、傘を持たずに雨が降り出した
とき、通勤途中で腹痛に襲われたときなど、何でもイ
エス様に祈り求めました。そしてイエス様は応えてく
だしました。これでもか、これでもかというほどに祈
りに応えてくださいました。イエス様は私を信じる者
に変えてくださったのです。

3 イエス様が私の救い主であると知るまでの 経緯について

神様を最初に意識したのは小学生になる前です。
小さい頃から好奇心旺盛で実験好きな私はしょっちゅ
う母に叱られていました。ある時、母は、「悪いことを
すれば、必ず罰があたるからね」と言いました。私は
「罰って誰が当てるの？」と聞き返すと、母は「天にい
て全部知っている神様だよ」とのこと。ただ二人で近く
の畑に行き、空を見上げて立って「神様ごめんなさい。
罰を当ててください」と祈ったのを覚えています。

それ以後、正月には父に連れられて何度か初詣（は
つもうで）に行きましたが、神様は天にいるはずで、神
社にはいないと思っていました。しかし、イエス様のこと
はまったく知らず、クリスチャンは十字架に架けられ
て殺された人を拝んでいる、気味の悪い人たちだと思っ
ていました。イエス様を私たちと同じ、ただの人間だと
思っていたのです。

思春期には、人の死や人間の理想の在り方について
考え込んで眠れない時期もありました。高校時代に
倫理社会という授業があつて、哲学者や宗教者のこと
ばや教えを学びました。そこには「徳を積みなさい」
とか「修行しなさい」とか「絶えず、正しさを求めな
さい」とありましたが、目指す人間の理想の姿がわか
らないままでした。しかし、捜し求めている、人のある
べき理想の姿をマタイの福音書の中に見つけたのです。
うれしさと同時に恐れと驚きを感じました。

だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。
(マタイ 5・48)

あなたをつまずかせるなら、切って、捨ててしまいなさい。
(マタイ 5・29、30)

イエス様は「完全になりなさい」ではなくて、「完全でありなさい」と言われたのです。宗教が教えるように、修行をしたり徳を積んだりして立派な人になりなさい、とは違って、イエス様は、神様のように完全でありなさい、と言われるのです。イエス様のお考えでは、人が正しいことを行うことは当然のことであって、心に悪いことを考えただけでも、それを行ったと同じなのです。神様が人に求められる正しさはこの世で言う正しさとは次元が違う、と知りました。「義人はいない、一人もない」という意味が理解できました。神から見れば、すべての人に罪があることが分かりました。

もし、右の目が、あなたをつまずかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。……もし、右の手が

罪を犯せば死ななければなりません、この箇所は、罪を犯す前の時点で、罪を犯すきっかけとなる目をえぐり出したり、手を切って捨ててしまいなさいと言っているのです。神の罪に対する厳しさと死の恐ろしさに驚きました。

一つ理解できないことがありました。旧約聖書の時代、罪の贖いとして傷のない牛や羊が捧げられました。私は、牛や羊を身代わりとすることが理解できませんでした。ベック兄に質問しました。「人の代わりに捧げられた羊や牛がかわいそうです。罪を犯した人が本当に心から悔い改めることだけで赦されないのですか」。ベック兄の答えは「血を流さなければ罪は赦されません。これは原則です」

生まれながらに罪のないイエス様が流された血潮が

なければ、罪の赦しはないことがわかりました。

私は聖書のみことばを通して自分の罪を教えられ、イエス様による救いを知りました。また多くの出来事を通して、イエス様が生きておられ、聖書に書かれています。それが真実であることを体験的に教えられました。

集会に集い始めて半年、一九八一年六月に洗礼を受けました。イエス様は私の救い主であり、いつも共にいてくださるお方です。

後藤隆(ごとう たかし)

一九四九年武蔵野市生 電気通信大学物理工学科卒
神奈川県海老名市在住 町田キリスト集会

キリスト集会へのご案内

吉祥寺キリスト集会

東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11

【電話】0422-21-8450 (集会所)

日曜礼拝・福音集会

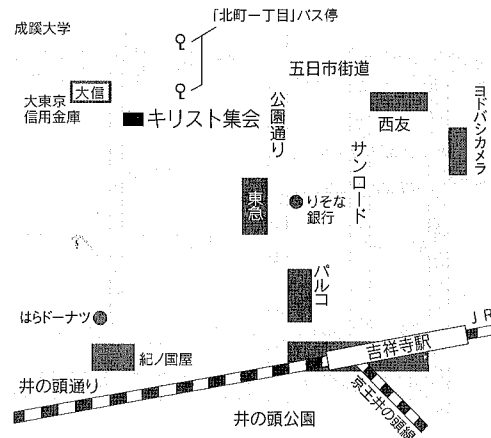
10:00 / 18:30

火曜学び会 11:00

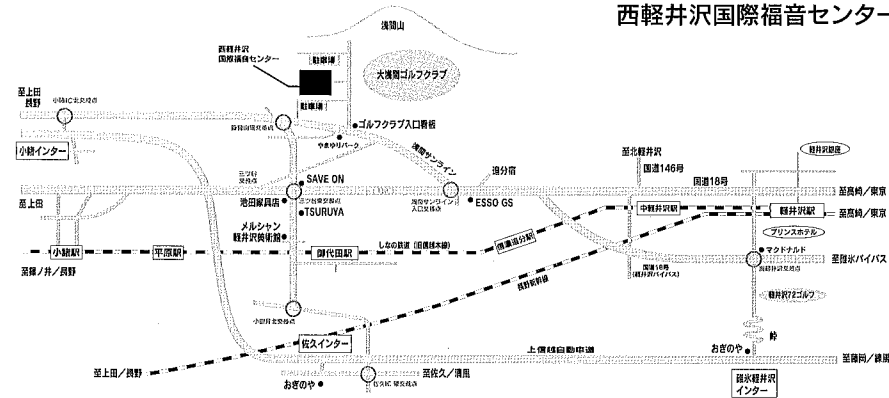
木曜祈り会 19:00

子供日曜学校 9:00

中高生日曜クラス 9:00



西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター

【電話】0267-32-6400

長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス

【電話】0267-32-6444

長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分(1000円程度)徒歩45分=3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。

いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。

みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。

出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、パンとぶどう液にあずかります。

あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。

礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

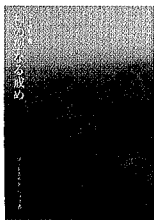
家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。

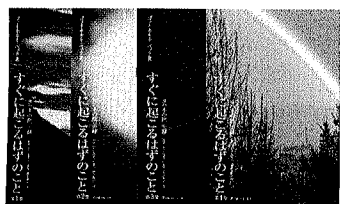
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。



モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと—ヨハネの黙示録 (第1～4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ —私たちは主のもの

証しシリーズ (第1～9集)



いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

※主のご再臨が近づき、すべての本を100円で配付しています。
お気軽にお申し込みください。

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

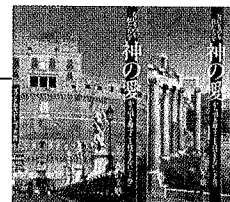
「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにもも私たちが神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

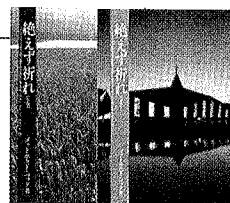
吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎらない可能性」などのメッセージが収められています。



■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

主は生きておられる 第36号
定価100円（税込み）2015年4月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一 古田公人 田中順治 福留伸子 石塚稔成 石塚優子 岩本秀造 岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	長岡健次
題字デザイン	飯守格太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。